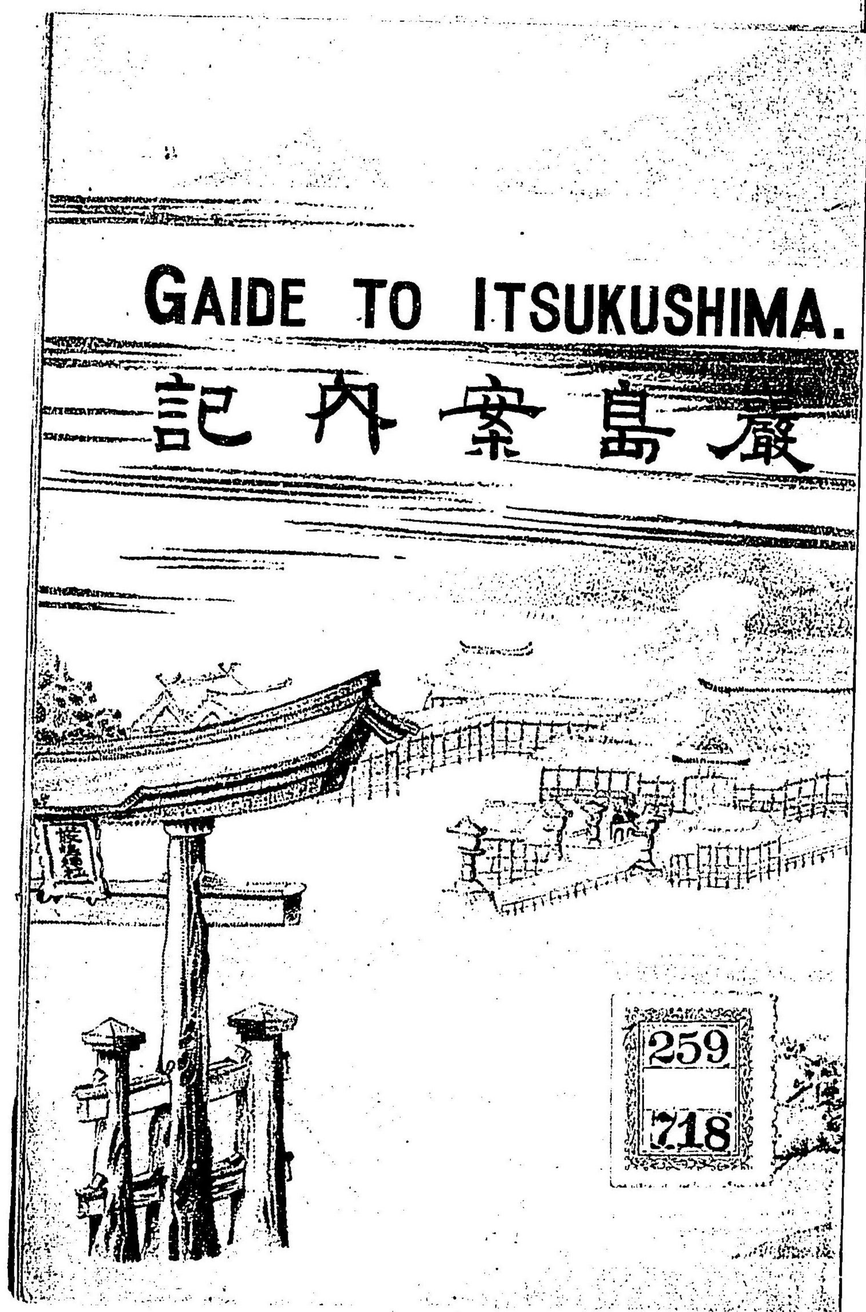
GAIDE TO ITSUKUSHIMA.

嚴島案内記



259
718

特46
179

例言

一本書は第五回内國勧業博覽會の開設に際し。嚴島準備會の囑に依り島内に於ける名勝舊跡の現狀を紹介せんがために編纂せるものと一編纂の事項中最も重きを置きたるは嚴島神社に關する事跡にしてこれに次ぎ島内各地に於ける山海自然の美が各特殊の風光を發輝して造化の英靈を發き。優に宇内無比の絶景を呈しつゝある所以の一斑を紹介せんことをつとめ。併せて從來闇黑の裡に埋伏せる由緒ある舊跡の發揚に意をいたしたり

一本書卷頭の市街地圖は寧ろ市街の三面を包圍せる公園其ものゝ地勢通路等を示すを以て主とせり。蓋し黑線を以て表したる周圍公園の通路はいづれの處に於ても山海の眺望に富みて新生面を開かざるはなく。頗る趣味ある遊覽線たるを以てなり。其名勝の符號點の如き

明治
42 11 8
内交

讀者必ずしも拘泥するを要せざるなり

一本書編纂の材料は總て最新の事實に據り調査せり

一本書中一部の記事は匆卒の編纂にかゝり。誤謬疎漏の點なきを保せず。讀者幸に示教を玉はんことを

明治三十六年三月

著作者識

嚴島案内記目次

嚴島町市街及其附近略圖
御山宮山麓路略圖
名勝古跡寫眞版二十圖

第一編

嚴島の地勢及概況　一
嚴島神社　一
御鎮座　一
歷朝崇敬の一班　三
殿廊の結構　六
大祭表　八
年中祭事（附祭）　一一
本社の國寶　一四
本社の寶物　一九
本社の繪馬　二五
社頭の明燈（八幡の一）　二五
鏡　池（八幡の一）　二六
三笠濱（八幡の一）　二八
日　吉　二八
康頼卒塔婆の跡　三〇
康頼の石碑　三〇
寶物陳列館　三〇
寶　庫　三一
文　庫　三一
御衣裳藏　三一
御　厩　三一
三翁神社　三一
御花畠　三一
御幸松　三二
千疊閣　三三
五層塔　三五
廣島縣壯兵殉難碑　三六

第二編

嚴島町市街及其附近に於ける名勝舊跡
有の浦（八幡の一）　三五
尼　濱　三六
大願寺　三六

住吉神社　三八
石風呂　三九
木比屋谷公園　三九
大元公園（八景の一）　三九
大元神社　四一
經納山（背後山）　四二
多寶塔（二重塔）　四三
出城　四三
大聖院遺跡　四四
瀧宮公園　四六
白糸の瀧（八景の一）　四七
瀧宮神社　四八
瀧見岩　四九
紅葉谷公園　五〇
光明院　五二
谷ヶ原（八景の一）　五二
鳥居松公園　五三
耕名橋　五三
瀧の尾公園　五三
寶藏院　五三
金石地蔵　五三
梅林　五四
長濱公園　五四
海水浴場　五四
長濱神社　五五
要害山公園　五五
宮尾城址　五五
今伊勢神社　五六
存光寺　五六

第三編　御山

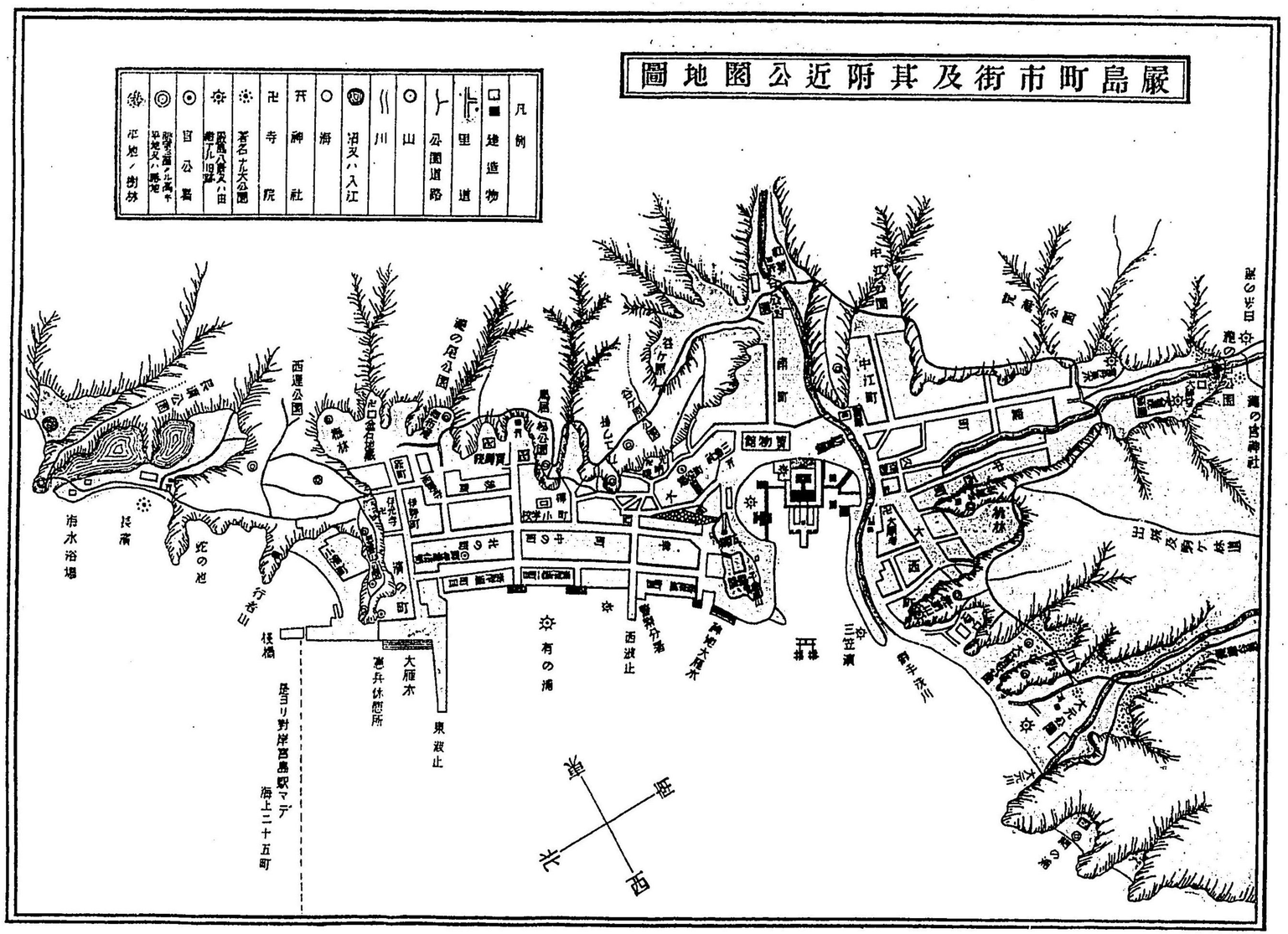
御山の開基　五六
一の鳥居　五八
懺悔地獄及其他　五八
新不動遺跡　五八
御幸橋　九五
五町目　五九
中の堂　五九
岩屋樂師　五九
幕岩　五九
二王門　六〇
御山神社　六〇
御山神鶏の由來（八景の一）　六二
求聞持堂（本堂）　六三
（鎮護殿。開創本尊能仁佛）
三鬼神社　六四
鎧擂堂　六四
見沙門堂　六四
石洞門　六四
岩屋不動　六四
此邊一帯の風景　六四
御山頂上（頂上石）　六五
觀音杉—龍燈　六五
酒手岩　六六
鎧岩　六七
大日堂　六七
日洗樂師　六七
三界萬靈水掛地蔵　六七
水晶石　六七
奥の院（大師堂・鐘楼・宝物殿・其他）　六七
御山二王門より八西に於ける名所旧跡
鹿屋谷　六八
三飯岩　六八
岩屋大師—附近の風景　六八
繪馬岩　六九
龍ヶ洞　七〇
駒ヶ林—古戦場　七〇

第四編　七浦

島廻　七二
島廻の順序及樣式　七四
浦廻及漁業　七五

嚴島町市街及其附近公園地圖

凡例
- 建造物
- 里道
- 公園道路
- 山
- 川
- 沼又ハ入江
- 海
- 神社
- 寺院
- 名所旧跡
- 公園
- 海岸ニ面シ高サ平地又ハ断崖
- 花壇ノ樹林



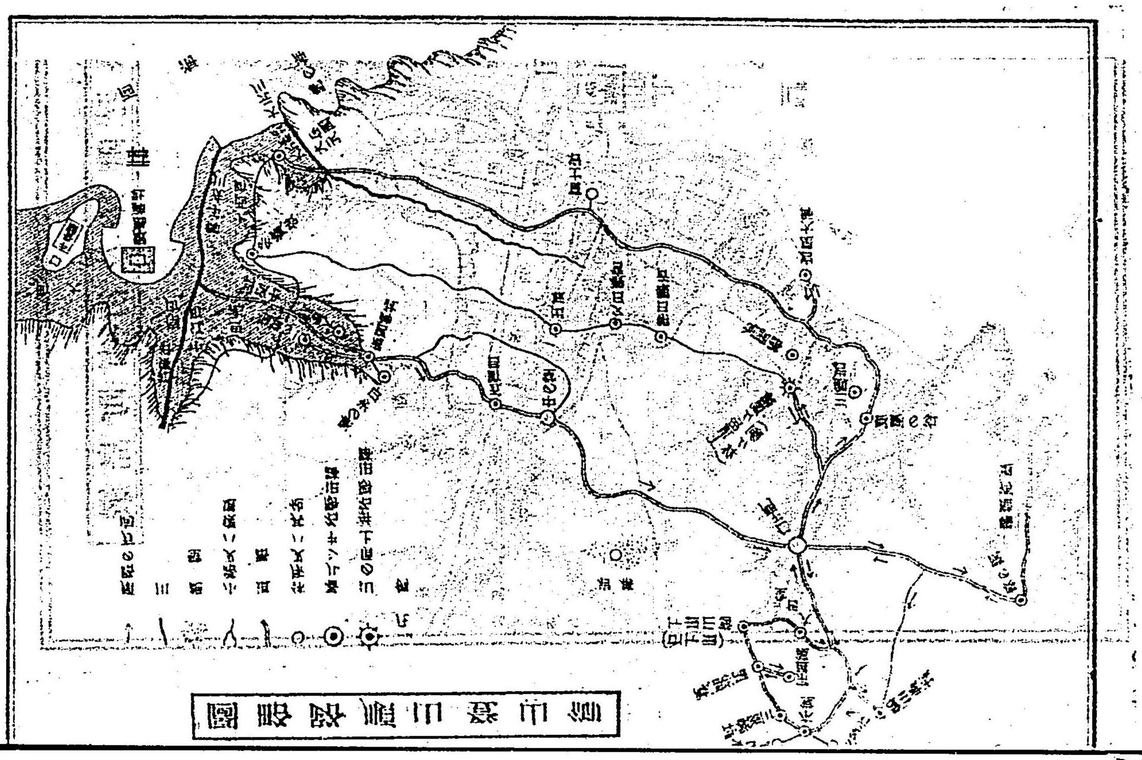
目次

海岸より望める市街 …… 一八六
海岸（遠景）
塩泉の出現 …… 一八七
杉の樹 …… 一八七
杉の樹の説 …… 一八八
會船水 …… 一八八
包ケ浦 …… 一八八
包ケ浦神社 …… 一八八
鷹の神社 …… 一八八
厳島神社 …… 一八八
大鳥居 …… 一八八
管絃祭 …… 一八九
管絃祭神社 …… 一八九
高安ケ原 …… 一八九
養父崎 …… 一八九
養父崎砲台 …… 一九〇
鹿ノ口 …… 一九〇
白蛇神社 …… 一九〇
鹿の宮神社 …… 一九〇
草刈場 …… 一九一
鹿の園 …… 一九一
須屋神社 …… 一九一
御床浦 …… 一九一
御茶屋跡 …… 一九二
内侍者 …… 一九二
鶴の浦 …… 一九三
鶴の浦ノ見晴の海岸 …… 一九三
鶴の浦 …… 一九四
七浦に於ける風景上の概観 …… 一九六

總錄

漁業 …… 一九六
商業 …… 一九六
商業ノ所属 …… 一九六
商業ノ分類 …… 一九六
商業ノ特徴 …… 一九六
商業ノ特徴 …… 一九七
商業ノ特徴 …… 一九七
商業ノ特徴 …… 一九七

圖略路順山登山御



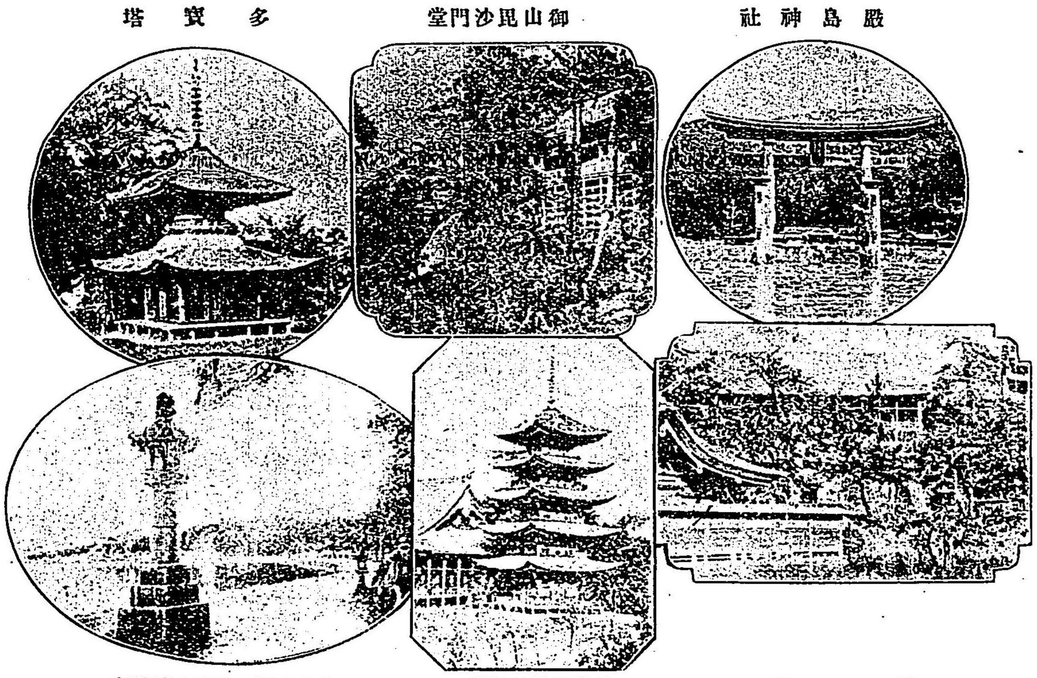
嚴山登山鳥瞰圖

The View of Itsukushima.

殿島神社

御山毘沙門堂

多寶塔



鏡池

千疊閣及五層塔

大元公園ヨリ有之浦遠望

The View of Itsukushima.

駒ヶ林

三笠濱

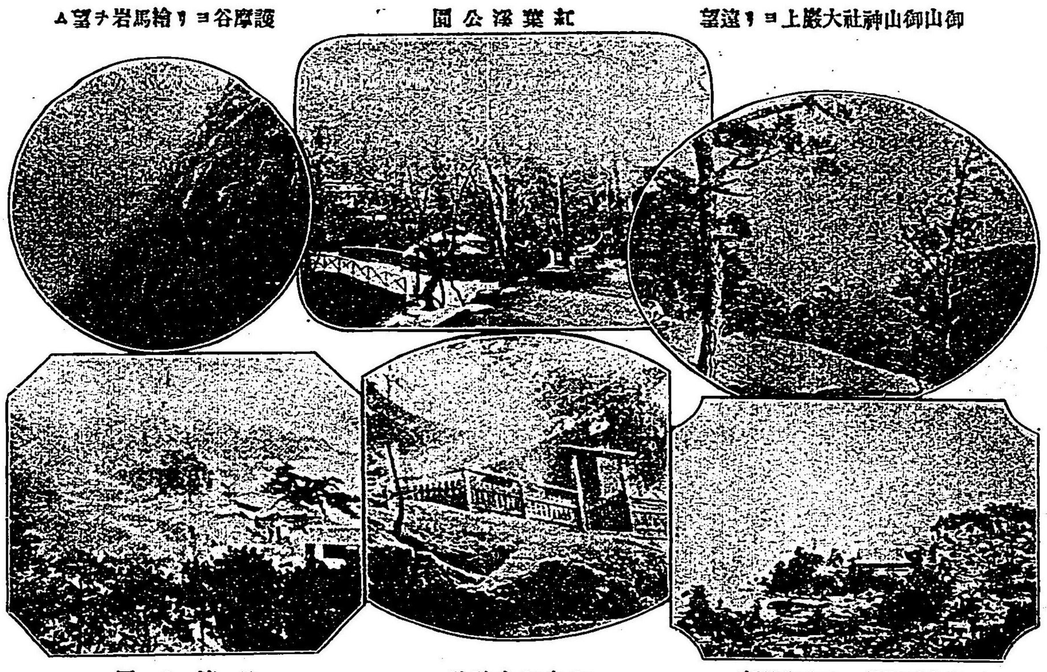
御山木堂

御山千宗盛之梵鐘

聖崎逢來岩

御山三鬼神社

The View of Itsukushima.



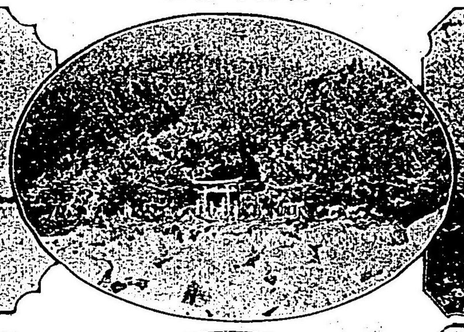
護摩谷ヨリ繪馬岩ヲ望ム　　紅葉谷公園　　御山御山神社大鳥上ヨリ遠望

長濱公園　　御山御山神社　　御山五町目ヨリ市街遠望

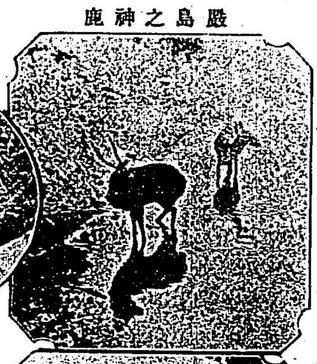
The View of Itsukushima.

須屋浦

養父崎神社

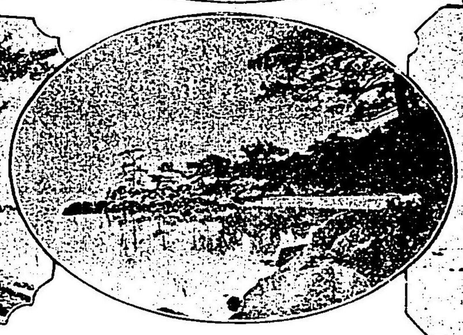


鹿神之島殿



杉之浦

御床浦神社



苹龍崎

嚴島案内記

第一編

嚴島の地勢及概況

我が大日本帝國海岸の地勢中最も曲折變化に富み。大に趣味を有せるものは瀨戸内海を以て最と爲す。而して此瀨戸内海中天地秀麗の氣を鍾めて粹然山水の精妙を極め。加ふるに歷史上の遺物名跡に富めるものは我が嚴島を以て最と爲す

嚴島は安藝國の海中にありて陸地を離るゝこと遠きは四五里。近きは五六町ばかり。北及西の一半面は佐伯郡二十日市、地御前、大野、玖波等の諸町村と相對し。東及南の一半面は佐伯及安藝兩郡の諸島嶼と相對し。又はるかに伊豫周防の諸山を望めり。島の周迴七里三十二町餘。面積三

千百四十餘町歩に達し。戸數八百二十三。人口三千二百十九を以て數ふ。島の中央に近く御山の高峯を控へ。其周圍には大小幾多の峯巒山脈起伏蜿蜒して四方に延びわたり。地形東北より西南に向ひて長く。不規則なる長方形を劃せるを見る

市街は島の西北面に位し。塔の岡及龜居山千疊閣を中央として東西の兩部に分れ。更に之を分ちて十八區と爲す。其東部市街の沿岸は即ち嚴島港にして。多數船舶の繫泊に適し。町内には町役場小學校を始とし。警察分署、憲兵出張所、郵便電信局、國有林保護官舍、銀行支店及棧橋會社等の機關備はらざるところなく。交通に適し。又至便。氣候温和にして寒暖度細工を以て生業と爲し。土地清潔。水質清晶。空氣又極めて新鮮なり町民の大半は木竹む。近年交通機關の開發に伴ひ。輸轂物、杓子類、竹細工、彫刻物等其大部を占物の販路。又其改良進歩と與に漸年盛況を呈するに至れり

本町は元伊都岐島と稱ふ。蓋し市杵島姫命の鎮座せるより伊都岐（市杵島姫命の別名）と稱へたるものなるべし。古の諸史皆此稱を用ひたり。近世專ら嚴島の稱を用ふるも又伊都岐と通はして慣用せる所なるべし宮島の稱も其起因は大神の宮居し玉ふより出でたるものにて。其唱呼既に久しく。高倉帝行幸記に宮島と記しあるを見ても知るべきなり

入海の八十浦かけて十島なる　小野寛

なかに香ふかき島は七浦

恩賀しまのすかたはをのづから

よもぎの山もこゝにありけり　在原業平朝臣

嚴島神社

嚴島神社は天照大神の御女子。市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を齋き祀れるところにして。三神與に大神の詔のまに〳〵。高天原より豐葦原

の中國に天降り座て。皇御孫命を輔け。又皇御孫命の爲に齋かれたまふ。而して市杵島姫命か我か嚴島に降臨ましませし時代は。其年歴頗る悠遠にして。今俄に考ふべからずと雖も。推古帝時代より以前既に本島に降臨まし〳〵て。御山足引宮に御鎮座ありし事蹟は照乎として明かあり。推古帝の朝に至り。當郡の守佐伯鞍職。御神託により官奏を經て宣下を蒙り。島内の長老所翁と與に力を併せ。御笠濱の大石小石を切り平け。奥山に繁立てる大木小木を伐り採り清き荒磯の底津盤根に宮柱太敷立て當世の神籬と定めて。かの足引宮より市杵島姫大神を遷して鎮め祭り。又田心姫命湍津姫命の二神をも配祀り。又相殿に國常立尊。天照大神、素盞嗚命の三神を祀り。又客神社に於て。正哉吾勝勝速日天忍穂耳命、天穂日根命、活津彦根命、熊野櫲樟日命の五神を齋奉りたるは同帝の御宇即位元年癸丑十一月十二日のことにして。今を去ること正に一千三百十一年。嚴島神社御鎮座の基礎茲に定りたるなり

是より五百餘年の星霜を經へ。社殿の荒廢甚しかりしか。當國の主平清盛靈夢の感により。大に土木の工を興し。神領を增加し。經營數年を重ねて社殿を改め造り。百八間の回廊を起し。大鳥居摂社末社に至るまで盡く改造し。其壯麗美觀遙に前古に卓出するに至れり

爾後明治維新に至るまで。殆ど七百年。上は朝廷を始めとし。歴代の名門武將等か或は神領を增加し。或は社殿を造營し。或は寶物を藏めし。或は本社に參籠して親しく拜禮をつとめたる等。其崇敬のなか〳〵をろかならざりし事跡は枚擧に遑あらざるなり。上にして既に然り。下億兆の崇敬に至りても又これに讓らず。參詣の輩雲霞と共に四時去來を絶たず。誠に本邦の大社皇國の守護神にして。其神德の壯嚴なる。今や益遠く宇内萬邦に輝きわたり。仰がぬものこそなかりけれ

明治三十二年四月五日。内務省本社の建物を以て特別保護建造物に編入し。次で今回大修繕の擧あり。神殿の壯麗前に數倍し。神德ますま

す新たなり

やはらぐる光りも高き宮島の
神にあゆみをはこぶ諸人

海原やまたもたくひは浪の上に
宮居しめたる嚴島かな

中納言持豊

恭惟市杵島姫命。神聖靈蹤益壯哉
廟貌巋然浮海水。怪看歴氣吐樓臺

石川丈山

歴朝崇敬の一班

承安四年三月十六日後白河法皇御臨幸座まし本社へ御參詣あり。同年四月九日還御あらせらる

治承四年三月十九日高倉天皇御臨幸座まして本社へ御參詣あり同年四月九日還御あらせらる

治承四年九月二十二日高倉天皇再御臨幸座まし本社へ御參詣あり御願文を納め玉ふ

安元元年十二月大介藤原朝臣を勅使として御供田十三町一反を寄せ同二年神領として高田郷を寄せらる

弘安四年元寇來侵の際執權北條時宗より數日間異賊降服の御祈禱あり。其後正應六年に至り執權北條貞時より因幡國船岡郷を奉納す

建武三年二月十八日足利尊氏本社へ參詣し願文及劍(銘友成)を獻じ。參籠して大神の加護を祈り。貞和四年八月二十六日に至り當國己斐村の地を獻し。廻廊以下造營の料に充つ

天文十年七月五日大宰大貳大内義興祠官に命じて廢典十一條を再興せしめ。同十一年五月二十日鎧一領太刀一腰神馬一頭を獻ず

天正十五年三月豊臣秀吉肥前名古屋へ出陣の途次本社へ參詣して大神の冥助を祈り。凱陣の後毛利輝元に命じて大經堂(今の千畳閣也)を建設せしめ且つ一萬石の寄進狀を納む

其他朝廷を始めとし平氏の諸將候は勿論。源頼朝、同實朝、征夷大將軍頼經、同頼嗣、同惟康親王、同久明親王、足利義昭、大内義弘、同義隆、毛利元就、同輝元、福島正則、淺野藩候等よりも屢神領の奉納贈位の沙汰(古の贈位は神に位階を授くるにありら定むる爲めなり)寶物奉納等の事ありしことは枚擧に遑あらず。以て其神德の壯嚴なる一班を推察し奉るべきなり

本社本殿　祭神　三座

市杵島姫命(主神)。　田心姫命。　湍津姫命

相殿　三座

國常立尊。　天照皇大神。　素盞嗚命

一　本殿　梁間六間三尺六寸　桁行十三間二尺三寸　御鎮座の正殿をいふ

一　大床　幅五尺

一　幣殿　梁間三間一尺五寸　桁行三間一尺八寸　正殿の前にあり

一　拜殿　梁間六間四尺四寸　桁行七間四尺四寸　幣殿の前にあり

一　祓殿　梁間六間四尺八寸　桁行十三間三尺八寸　拜殿の前にあり

一　高舞臺　竪三間四尺　横三間　祓殿の前にあり

一　平舞臺　高舞臺の前後左右をいふ　平面積百八十六坪あり

一　樂房　梁間一間五寸　桁行五間九寸　二宇左右に別れて平舞臺に連る

一　廊嘴　幅一間五尺三寸　長七間一尺三寸　平舞臺の前端をいふ

一　門客神社　廊嘴の左右にあり。俗に沖惠美須と稱す。豐磐間戸命及櫛磐間戸命を祀れり

一　廻廊　幅二間二尺長さ百四十八間二尺にして本社の左右に延長し。曲々節を爲し一間毎に鐵燈籠を釣れり。これ百八燈の一にして杜頭の明燈と稱し。嚴島八景の一に數ふ

客神社　祭神　一座

正哉吾勝勝速日天忍穗耳命。　天忍穗耳命。　天津彦根命。　活津彦根命。

熊野櫛樟日命

一本殿　梁行五間二尺三寸　桁行七間五尺五寸　幅一間五尺　長三間

一大床　幅四尺六寸

一弊殿　梁行二間三尺五寸　桁行二間四尺七寸

一拜殿　梁行四間一尺八寸　桁行十三間二尺

一祓殿　梁行五間一尺四寸　桁行五間三尺五寸

一揚水橋　本社の東隣にあり　幅一間五尺　長三間

一朝座屋　本社と客神社の間にあり　梁行五間一尺五寸　桁行十一間八寸

此處に講社事務所の設あり

一大國神社　本社の西側にあり。祭神大國主命

一天神社　祭神菅原道眞公にして大國神社の西にあり

一長橋　本社の西隣にあり　幅一間四尺八寸　長十八間

一反橋　長橋の西にあり　幅二間二尺　長十一間三尺

一能舞臺　本社の西にあり

舞臺三間四面の外脇座二尺四寸地謠座九尺　橋長七間幅一間樂屋五間に三間とす

一行宮の遺跡。今の能舞臺邊是なり。治承四年三月高倉天皇御臨幸の際此處に行宮を設けさせ玉ひしと云ふ

一大華表

本社廊嘴(火燒前)を距ること八十八間。巍々として三笠濱頭の一大偉觀を爲せり

一柱高　七間二尺五寸

一全廻　五間三尺三寸

一棟長　十二間一尺七寸

一總高　八間三尺七寸

一副柱　高四間四尺廻三間

一袖貫　長六間六寸幅二尺四寸五分厚九寸

一屋根幅　片流二間六寸額庇二尺七寸長く出づ

一上棟より軒先まで。一間六寸

一兩柱左右の距離。五間五尺八寸

一扁額　竪一間二尺六寸横五尺八寸

是故有栖川二品熾仁親王殿下の御染筆にして。表裏二面あり。表に嚴島神社。裏に伊都岐島神社とあり。また以前の額は後奈良帝の宸筆にして大内義隆の奉納にかゝり。古代のものは表は小野道風裏は弘法大師の筆なりといふ

此大華表も本社創建と同時に建設せられ。數度の改造を經たるにて。現今のものは明治七年十二月工を起し。翌年七月に至り功を竣へたるなり

此大華表の汀に宮幕貝とて。間々宮殿又は鳥居の形狀を摸樣に現はしたる。一種のあさり貝を產することあり

遠島の下つ岩根の宮はしら
波の上よりたつかとぞ見る

玄旨法印

さす潮も光をそへて島の名の
宮居すゞしき夏の夜の月

水是潮兮山是島。山光相映落波瀾。
不雜當處神仙境。百八廻廊一社壇。
後青山兮前水濱。德輝嚴島大明神。
今霄有心萬燈開。百八廻廊月一輪。
天下名區市杵島。仙査況問月花秋。
龍燈光失海心火。歷氣象鮮波上橫。
留急神鴉鴉欲下。砂明瑞鹿曉猶遊。
人間伊境眞難得。應向廣寒宮裏求。

似雲法師

釋自休

德大寺江月

頼杏坪

本社の祭事

嚴島神社の御祭事中最も盛大なるは管絃祭にして。これに次で有名なるものを年越祭延年祭桃花祭及鎭火祭と爲す

年中官祭

元始祭。 一月三日之を行ふ。神饌祝詞神樂及奏樂あり

祈年祭。 二月中臨機時日を定めて之を行ふ。班幣縣廳に着して縣知事又は書記宮來島の上勅使奉幣式を執行し。神饌祝詞神樂及奉樂あり

例祭。 六月十七日之を行ふ。奉幣使參向の儀前に同じ

大祓及鎭火祭。 十二月三十一日之を行ふ

神前に於て祭典執行の後。當日午后六時より千疊閣下海岸通神地内に於て松明式あり。東西の町民より奉獻して點火せるところの大炬小炬數百本。交互東西に奔走して之を焚き頗る壯觀を極む

東西曲巷人猶鬧。百八廻廊燈未銷　登々菴

半夜鐘聲報新歲。臨砂萬炬汲春潮

以上の外なほ左記の御祭典あり

一　一月一日　神饌祝詞奏樂あり。二月以下毎月一日之に準ず

一　一月三十日　孝明天皇祭

一　四月三日　神武天皇祭

一　九月十七日　神嘗祭

一　十一月三日　天長節

而して以上皆神饌祝詞奏樂あり

一　二月十一日　紀元節

一　六月三十一日　大祓式

一　十一月廿三日　新嘗祭

年中私祭

神衣獻上祭。 毎年一月一日午前一時を期して祭典を執行せられ。宮司御神衣を奉じて內陣に獻じ奉る。是れ太古大神が本島へ渡らせ玉ふに當り周防國和木浦に於て。先づ神衣を更め奉りたるより起りたるものなりといふ

年越祭。 陰曆正月六日之を行ふ

幸福なる新年を迎へんとて遠近より參詣するもの萬を以て數ふ。此夕諸方の商賈人殿に群集し。當年出來秋の穀物豫想相場を立つるの古例なるが概ね暗合すといふ

桃花祭。 陰暦三月十五日之を行ふ。桃花を獻じ曾利古、萬歳樂、散手、陵王、一曲、延喜樂、貴德、納曾利等の舞樂を演ずること古例なり。翌十六日より十八日まで三日間能舞臺に於て神能の執行あり古來神聖なる祭典の一として嚴正に執行せられたり。殊に其衣裝は大内家毛利家淺野家より奉納せられたるものとて。其錦繡綾羅の類現代製品の及ぶべからざる逸品尠なからずといふ

管舡祭。 陰暦六月十七日之を行ふ。本社年中の大祭にして。其盛大なること關西第一の祭事と稱せらる。この祭典は新造船三艘を組み合せ其上に御座を設けて屋形を構へ。周圍に幕を張り。艫の方には神鏡を懸け。舳の方には寶劍玉鉾を建て。又屋形の周圍には提燈數拾個を釣り。中央に神輿を載せ奉り。而して神官其左右背後に列座し。水主に至るまで烏帽子を冠り素袍袴にて各棹をとり。篝火を焚き。其艤裝いと壯嚴優美なり。又引船三艘左右櫂を揃へて前にたち。御供船盛裝して其後へに隨ふ。御船は午后四時大鳥居沖より外宮なる地御前神社の廣前に渡らせ玉ひ。神事奏樂あり。終りて後歸路長濱神社及大元神社沖に於て管舡あり。是より大鳥居をくゞり客神社の前にて奏樂前の如く。後御船を本社の廣前にすゝめ。管舡を奏しつゝ御船を三回めぐらして神事あり。それより本社に還御あらせらるゝの典例なりとす

當祭典數日前より參拜者及參拜者の船舶遠近各地より麕集し。殊に當夜は瀧船と和船とに論なく。各船競ふて其檣頭に幾多の紅燈を點して獻燈せるに依り。幾萬の紅燈海面を蓋ひ。頗る壯觀を極む

千百竿燈映碧流。綺羅爭艤木蘭舟
急絃豪管隨潮去。散作神娥洲畔秋

延年祭。 陰暦七月中に於て臨機時日を定めて之を行ふ。玉取延年祭と稱するもの是なり。當祭は御池の内本社前面の海中に於て。長さ三間餘の圓柱四本を方二間餘の距離内に建て。上部に横木を渡し の如く

組み。上部に於て狹く下部に於て廣くし。四面に七五三繩をはり。而して其中央に方五尺許なる臺を釣るし。中に三寶へ載せたる寶珠即ち玉を置くなり。本社祭事の終りつる頃。此寶珠を載せたる臺を綱にて上下すれば。數百千人の壯丁裸體にて海に入り。海水中に於て其玉を爭ふ。寶珠三寶より落下するや。群衆互に鯨波を擧げて之を揉み合ひ。上になり下になり之を爭ふさま。其壯觀いはん方なし。而して勝敗決し。寶珠を得たるもの之を事務所に報ずるに至りて止む。世話係此報によりて直に寶珠を點檢し。御神札及寶珠の外米俵金帛等の供物を賞賜せらるゝ例なり。此寶珠を得たるものは未來の幸福を追求し。異生の名譽とせるなり。此日祭事を見んとて各地より群集せるもの恰も諸の如し

右の外なほ左記の御祭典あり

一一月二日二の祭舞樂あり

一一月三日三の祭舞樂あり

一一月四日斧始式あり

一二月上旬末申日御鎭座祭あり

一九月十五日菊花祭舞樂あり

一十一月初申の夜御鎭座祭あり

本社の國寶（百〇二點）

一平家一門書寫經卷　三十三卷

平氏の一門淸盛以下三十二人の公達が數年の歲月を費やし。各精神をこめて手づから左記の諸經文を書寫し。以て本社に奉納せし所にかゝり。是實に本社寶物中の白眉と稱せらるゝものなり（經卷の紙中には佛優美なる又百戰すること能はざるものあり其他奇異の模樣あり著色美を盡し軸は多く水晶なり）

一法華經　各編　二十八卷

一無量義經　一卷

一一月五日地久節舞樂あり

一三月十七日靈神祭幷に講社安全式

一五月十五日講社島廻式あり

一九月十七日靈神祭幷に講社安全祭

一十月十五日講社島廻式あり

一十二月卅一日大祓祭あり

一観普賢經　一卷
一般若經　一卷
一阿彌陀經　一卷
一清盛願文　一卷

一平家納經函（總高一尺二寸四分、横九寸六分、蓋高二寸二分）
銅製蓋附三重ニグロメにして。金銀を鏤めたる雲龍五輪等を置金物とし。其製作いと優美巧妙なり。これ前顯三十三卷の卷を經納めたる内函にして。平家の奉納にかゝれり

一平家納經蒔繪唐櫃（深一尺四寸六分、横一寸七尺八分、一尺五分、蓋深二寸五分）
黑塗模樣桐葉金蒔繪にして。金物は總て金やきつけいと美麗なり。
同上經卷の外箱にして。福島正則の寄附にかゝれり

一法華經七卷　箱入

平清盛及弟頼盛の兩筆なり

一納經箱　一個
光明皇后御筆法華經八卷を納めたる

一平重盛甲冑　一領
製作質樸にして堅牢なり。公の用ゐられたる所なりといふ

一新羅三郎義光甲冑　一領
武田氏累代の重寶にして。大内義隆の奉納にかゝれり

一小樓威甲冑　一領
なか〳〵の尤物。千載の逸品なりといふ

一大内義隆甲冑　一領
南都の人春太光信の作にして。大内義隆の奉納せるところ

一高倉帝御扇　一本
扇面の歌は久我通親郷の手跡にして。高倉帝本島へ行幸の際納め玉ひし所なり

一安德帝御玩具　六種八點
御產衣。御笏。御飾太刀。御石帶。御箙。御檜扇三本

一松喰鶴蒔繪小辛櫃（堅八寸、横一尺五分、深五寸五分、足二寸五分）

安德帝の御產衣を納めまゐらす所にして。黑塗蒔繪松喰鶴の金銀模樣あり。中宮國司從四位下佐伯景弘朝臣の調進せるところとす

一文臺硯。　大內義隆の奉納せる所なり

一奚。（胴の廻り二尺三寸九分、高六寸五分朝廷よりの御寄進也）　婁。（皮巨り四寸五分紫絹緒）

一鼓。　胴及皮金地極彩色にして古色あり。又朝廷の御寄進也

一琴。平重衡の愛翫せる所にして。唐の雷家の作なりといふ

一佛器。（五鈷鈴。三鈷。金剛盤）弘法大師の所持品なりといふ

一大鳥居扁額　後奈良帝の御染筆にして。大內義隆の奉納にかゝれり

一紙本墨書御判物帖　壹綴

本社の御神領寄進狀及制令等。眞筆にかゝる古書願を集綴せしものなり

一槍鞘。　平氏の奉納せる所なり。

一赤柳檀佛像。　箱入

佛像二十一體の精巧なる彫刻にして。毘首羯摩の作なりといふ。納むる所の箱黑漆堅地にして。模樣は優美なる金金具とす。印度又は支那古代のものならんといふ

一狛犬　拾八軀

拾八軀各皆其狀貌を異にす。此類の彫刻品にては全國無比の逸品なりといふ。其高さ概ね二尺內外にして。長さ一尺八九寸の間にあり。元社殿內に安置せしものなり

一唐鞍飾馬　壹軀　同上

一金梨地螺鈿飾太刀。二振　大　中身長一尺五寸一分五厘　小　同　中身長一尺一寸五分

一螺鈿飾太刀　中身長二尺二寸九分

一藤卷太刀　中身長二尺四寸九分五厘。毛利輝元寄附

一兵庫鎖太刀　中身長二尺一寸九分五厘。　久明親王寄附
一兵庫鎖太刀　中身長二尺一分。　惟康親王寄附
一兵庫鎖太刀　中身長一尺八寸七分五厘
一兵庫鎖太刀　中身長二尺九寸六分。　將軍政所寄進
一嚴物造太刀　中身長二尺二寸　將軍頼嗣寄附
一足利尊氏短刀　中身長七寸九分五厘。　足利尊氏寄附
一同尊氏短刀箱　壹個
一扳頭面　壹面

今を去ること八百三十四年前。承安の頃より用ひ來たれるものなり。この面は當地神官野坂家古來相傳舞樂の秘曲にして。毎年正月五日禁裡御祈禱の際。用ゆること古例なりしといふ。これ承安三年政所の寄附にかゝり。寛政八年には天覽に供し。叡慮の書狀あり

一還城樂　一陵王　一納曾利

一散手　一貴德　一採桑老
一二の舞笑面　一二の舞嘯面
以上九品。何れも皆古來本社の舞樂に用ゐ來たれるものにて。實に木彫の逸品なり

本社の寶物

本社の寶物は以上に列記したる國寶の外。夫の三種の神器に亞ぎて朝廷の至寶たりし。玄上の琵琶及高倉帝の愛翫し玉ひたる小櫻を始とし。刀劍甲冑古書畫等の類枚擧に遑あらざれども。今茲に掲載するの餘地なきを以て之を畧す

本社の繪馬

本社の廻廊及殿内に掲額せられたる繪馬の數は。無慮一千餘點の多きに達し。是れ皆數百年來信者の奉獻せしところにかゝり。小は方尺位より大は疊五六疊大の積を有し。繪くところ山水花鳥人物樓閣草木什

器物植文書及歴史上の事實等。殆んど網羅せざる所なく。而して之れが筆跡の鋒々たるもの其一班を擧ぐれば。

雪舟あり。元信、常信、永徳あり。兆殿司あり。應擧あり。文晁あり。

置雪、景文、東洋、應震、岷山あり。祖仙あり。梅山あり。素絢、抱一、峻峯あり。宋紫石あり。米菴あり。士式、丈山、春水あり。恰も百花婉を競ひ。群芳秀を爭ふの觀あり。是れ神社の額面としては帝國内無比の大觀を極むるもの。一大美術館に入るの感あり。（大修繕後の殿廊内には建築物保管上の都合により。之を掲額することを得ざるに より千疊間を修繕して。其大部分を燈するの豫定なりといふ。）

社頭明燈（嚴島八景の一）

似雲法師

ところからたつの宮居もうかぶかと
見えてつらなる浪のともしび

梅月堂宜阿

波間より見えて數あるともし火に
宮居もしるしいつくしま山

嚴島雲晴飛繡甍。宮廊壯觀壓西瀛。
神燈波面幾千點。添著和光夜々明

二品親王堯延

好山朶々鏡中看。百尺樓臺海氣寒。
夜有神燈光映波。却疑星斗落欄干。

黄檗悅峯

一鏡池

客神社と朝座屋との間にありて。干潮の際。洲上別に一小池を爲せり

鏡池秋月（嚴島八景の一）

羽林雅季

ところから月もかゝみの池の名を
見せてや秋のかげみがくらん

宜阿

みやしろにかくる光も曇なき
かゝみの池にすめる月影

三位藤原宜通

海門靈跡甲西洲。嚴島佳名千古悠
多少行人宮觀賞。瑤池明月鏡池秋

一泓寒碧傍靈祠。　淨似菱花可鑑眉　僧　獨鱗

最是清秋明月夜。　其如漢帝影娥池

三笠濱

元大神の鎮ります灣内の總稱なりしも。何時の頃よりか。主として御手洗川々口なる。松原の鼻一帶の海濱を以三笠濱と稱するに至れり。此邊老松翠欝として生ひ茂れるのみならず。右は本社の殿廊に連なり。左は大元公園の翠色をひかへ。前は海を隔てゝ遙に佐伯郡沿海の諸山を迎へつゝ。海中に魏々たる大華表を望み。眺望頗る絶麗なり。殊に月の景色甚だよろしく。雪景又一段の佳趣あり

三笠濱餘雪（嚴島八景の一）　京　阜

ふりにけり三笠の濱の松が枝に　いく千代かけし雪のしらゆふ

誰もみな家路わすれてきてぞ見る　三笠の濱の雪の夕ぐれ　美　靜

白雪重々御笠濱。　平沙十里更清新　菅原在廉

夜來最覺好風色。　寒月和光同玉塵　黄　樂百泉

風糝飛花堆笠濱。　漁夫轉棹却迷津

雲林煙塢渾一色。　更訝波神撒玉塵

康賴卒堵婆の趾。

御本殿の東側なる揚水橋の下にあり。治承元年平判官康賴。清盛の逆怒に觸れ。法勝寺入道俊寛及丹波少將藤原成經と共に。鬼界ヶ島に謫せらるゝや。都に殘りたる老母を懷ひ。故郷を懇ふの餘り

さつまがた沖の小島にわれありと　親には告げよ八重のしほ風

おもひやれしばしと思ひ旅だにも　なほふる郷はこひしきものを

といふ二首の歌に。康賴法師の銘をも併せ彫りたる卒堵婆を作り。一日

〻作り得らるゝに隨ひ。風のたよりに任せ。祈願をこめて之を流し。流したる卒堵婆の數終に千本に達しけるが。其内一本此處の石に漂着しけり。折節康頼に緣故ある京師の僧侶。康頼を慕ふの餘西國修業を思ひたち。機を得て鬼界ヶ島にも渡り。其音信を探らんと志し。此島にわたり嚴島神社に祈願してありけるが。漂着せる卒堵婆を見て感涙に堪へず。即ちこれを神官に請じ。直ちに携へて京師に上り。康頼の老母に達し。法皇の叡覽に供しければ。法皇其志を感ませ玉ひ。清盛又以て神慮のある所となし。遂に康頼を赦して都へ歸されけるとなん

康頼の石燈籠。 卒堵婆の漂着したる岸の上に建設せられたり。臺石より寶珠まで高さ九尺餘。佛像雲龍寺の彫刻を施され。古色を帶びて風韻あり。これ康頼赦されて歸郷せし後。奉寄せる所にかゝるといふ

寶物陳列館。 梁行六間桁行十二間の建物にして。本社の背ド御垣ケ原にあり。これ明治二十八年第四回内國勸業博覽會開設に際し。贊同協會に於て建設し。後嚴島神社に寄附したるなり。爾後專ら神社寶物の一部を陳列し。以て衆庶の縱覽を許せり

寶庫。 筋違橋附近にあり。其構造は畦庫作と稱するものにして。頗る堅牢なるものなりといふ。嚴島神社の重寶珍器等擧つて本庫に藏めたり

文庫。 千疊閣の南の下にあり。本社の書籍を納む

御衣裳藏。 本社の裏手にあり。神能用の衣裳を納む

御廐。 東廻廊口の前にあり。本社の神馬をつなぎある處なり

三翁神社。 寶物館の東にあり。祭神は佐伯鞍職、所翁、の岩木翁の三翁にして。相殿に大巳貴命、平を祀盛清れり。御殿三棟にしていづれも七尺二寸四方。拜殿桁行六間一尺梁行五間餘にして前に金鳥居あり本社の摂社にして例祭は九月二十三日とす

御花畠。 御本社西部廻廊の背面。御手洗川に沿ひたる一條の堤坊をい

ふ。堤の兩側に櫻極數十株ありて。三春の花月に富めり

芳野嵐山世久聞。誰知此地獨超群　頼杏坪

遂來宮裏花千樹。穿去一雲又一雲

花のはるあきのみや島來て見れば　道茂

なほ一しほの月の夕暮

御幸松。 承安四年三月。後白河法皇當島へ御臨幸の際。此處に行宮を設け玉ひし紀念として植附たる松樹。幾多の歳月を經。數圍の巨木となりしが。今や朽腐して丈餘の根幹を存し。なほ當代の事蹟を追懐せしむ

千疊閣。 元大經堂と稱し又俗に千疊敷と稱ふ。市街の中央なる龜居山の岡にあり。梁間十間五尺桁行二十間棟高五十八尺椽幅八尺にして四方に欄干を設けたり。是豐臣秀吉公朝鮮征伐の際。九州名古屋城に出陣の途次。嚴島神社に賽して大神の冥助を祈り。凱旋の後。文祿年中毛利輝元及安國寺惠瓊に命じて建設せしめられたる所にして。この堂には元釋迦如來の立像及脇士阿難迦葉の彫像を合祀せしが。維新後之を大願寺に移し。以て豐公の神祠を安じたるなり

始め此上には楠の大樹ありて高く漢に秀で。鬱々として一山を蓋ひたりしが。秀吉伐て以て夫の有名なる安宅丸新造の用材に供し。其餘材を以て此跡に大經堂を建營するの資材に補したりといふ

當閣の建築は宏壯にして雄偉。淡泊にして豁大。東西南北一黑の隔壁を設けず。遠近山海の眺矚踞して雙眸に收むるを得べく。座して神襟を一掃するを得べし。三百拾餘年後の今日偉人の氣宇を代表して魏々青空の風神を拂ひ。永く天下の公堂として克く億兆の衆を容れ綏遠の間自ら當代の英風を追懐せしむ

因に記す。明治三十四年八月十五日當閣に於て。廣島山口岡山及島根四縣聯合凱旋祝賀會を開催せらるゝや。名譽ある陸海軍人將校有志のこの閣に會する

ふ。堤の兩側に櫻極數十株ありて。三春の花月に富めり

芳野嵐山世久聞。誰知此地獨超群　賴杏坪

蓬來宮裏花千樹。穿去一雲又一雲

花のはるあきのみや島來て見ればなほ一しほの月の夕暮　遊茂

御幸松。 承安四年三月。後白河法皇當島へ御臨幸の際。此處に行宮を設け玉ひし紀念として植附たる松樹。幾多の歳月を經。勢圍の巨木となりしが。今や朽腐して丈餘の根幹を存し。なほ當代の事蹟を追懐せしむ

千疊閣。 元大經堂と稱し又俗に千疊敷と稱ふ。市街の中央なる龜居山の岡にあり。梁間十間五尺桁行二十間棟高五十八尺椽幅八尺にして四方に欄干を設けたり。是豐臣秀吉公朝鮮征伐の際。九州名古屋城に出陣の途次。嚴島神社に賽して大神の冥助を祈り。凱旋の後。文祿年中毛利輝元及安國寺惠瓊に命じて建設せしめられたる所にして。この堂には元釋迦如來の立像及脇士阿難迦葉の彫像を合祀せしが。維新後之を大願寺に移し。以て豐公の神祠を安じたるなり

始め此上には楠の大樹ありて高く漢に秀で。鬱々として一山を蓋ひたりしが。秀吉伐て以て夫の有名なる安宅丸新造の用材に供し。其餘材を以て此跡に大經堂を建營するの資材に補したりといふ

當閣の建築は宏壯にして雄偉。淡泊にして豁大。東西南北一黑の隔壁を設けず。遠近山海の眺矚踞して雙眸に收むるを得べく。座して神襟を一掃するを得べし。三百拾餘年後の今日偉人の氣宇を代表して魏々青空の風神を拂ひ。永く天下の公堂として克く億兆の衆を容れ緩遊の間自ら當代の英風を追懐せしむ

因に記す。明治三十四年八月十五日當閣に於て。廣島山口岡山及島根四縣聯合凱旋祝賀會を開催せらるゝや。名譽ある陸海軍人將校有志のこの閣に會する

もの八百十餘人。豊公征韓の役凱旋を去ること。正に三百十餘年にして。始めて出光輝ある盛典を挙げたるなり

千人閣上憶豊公。曾宴群雄野戰功　木原桑宅
當日豪華今已盡。猿猴獨戲落花風

月夜書千疊閣梁上　清人劉之高

山高星落夜無人。踏閣垂臨碧海濱
風靜仙娥波上舞。輕々移步韈生塵

山々のかすみのひまにちりてくる　堯淵
花かあらぬか見ゆるしらなみ

またこんと誰にもえこそいひをかじ　塙團右衛門直之
心にかなふいのちならねば

五層塔。俗に五重塔と稱す。千疊閣と相並びて龜居山の東端にあり。建物方二間半。高さ相輪頂まで九十一尺一寸。應永十四年七月の建立にかゝれり。塔内には元釋迦如來及脇士普賢並に文殊菩薩の像を安んじたりしが。維新の後これを他に移せり。内國に於て五層塔の建築せられたるもの尠なからずと雖も。本塔の如く優秀なるものは稀なりとす（是何人の建築なるを詳にせず。一書に御奈良院の御字。天文元年將軍義晴建立云々の事見えたり。天文元年は今より三百七十二年前に當り。應永十四年は今より四百九十七年前に當れり。而して千疊閣の建築は文祿年中なるを以て。今より三百十餘年前なること明なり）

廣島縣壯兵殉難碑。亀居山の西端にあり。明治十年西南の役に於ける本縣千人隊の忠勇紀念碑にして　腔血報國と大書せる下。請士忠勇戰死の狀況を誌すること詳かなり。碑文は陸軍中將谷干城の撰にして賴元啓の書に成れり

第二編

嚴島市街及其附近に於ける名勝舊蹟

有の浦。今の東部市街大半の地は古の所謂有の浦の埋立地にして。嚴

島八景の一たり。今や昔の面影を改めたりと雖も。元天然の風趣を有したる海濱なりしこと推察せらるゝなり

つなぎよるたよりや有の浦なみに　　參議公長

とまり定むる船ぞかずそふ

群帆落日向千山。繫纜翠巖碧石灣　　僧獨麟

借問東西南北客。夢魂不至人間

尼洲。 一に二位の洲といふ。今の海岸通一丁目邊に當れり。壽永の昔長門檀の浦にて源平の戰に。二位の尼安德天皇を拘き奉り海底に投せしに。其戸此洲に漂着せりといひ傳ふるもの是なり

大願寺 龜居山本願大願寺と稱し。西京大覺寺派に屬せり。元眞言宗の古義派にして其開基頗る古く。年曆久遠にして考ふべからず。現代の院主松峯光典より四十六世の祖。榮繁上人(文治年間)を以て中興の祖と爲す。本尊は弘法大師の作藥師如來の像にして。其他釋迦如來、阿彌陀如來、如意輪觀音、阿蘇迦葉兩尊者及弘法大師等の像を祀れり。當時は元嚴島神社修理造營の掌にして。大聖院に次きたる門閥たり。現有寶物の主要なるもの左の如し

國寶

一 當寺本尊藥師如來坐像　幅御丈一尺四寸余　御丈一尺一寸余　寺傳弘法大師作

一 釋迦如來坐像　幅御丈二尺八寸余　御丈二尺八寸余　寺傳行基菩薩作

一 阿難尊者立像　幅高三尺一寸余　九尺九寸余　寺傳昆首羯麻作

一 迦葉尊者立寺　幅高三尺一寸余　九尺六寸余　寺傳昆首羯麻作

寶物

一 龜居山記　桐箱入一卷

右は寛文の頃。當寺の住職以空大僧正。靈元天皇へ拜謁の際。天皇より拜受せし所の宸翰にして。巻中嚴島神社に關する秘事等記載あり。院主の外堅く見ることを禁ぜり

一 瀟湘八景野立屏風　八枚折壹雙　高三尺四寸六分　幅一尺八寸七分

右は當寺の住職尊海上人。大藏經を得んが爲に。大内義隆の紹介により。渡韓の際。請ひ得て携へ歸りたるものなりといふ

一豐公陣中枕屏風　二枚折　三十六歌仙の繪　光信筆　光正筆

一梵鐘。　鐵製　徑八寸五厘　高一尺二寸八寸　銘に允曉庵小鐘とあり。豐公征韓の役分捕せし所なりといふ

一酒壺　一名吸筒　仝　上

以上三品は豐臣秀吉公の寄附にかゝるといふ

一兩界曼荼羅。　貳幅　興教大師甃鑁上人筆

一大釜　鐵製　徑三尺七寸　高二尺七寸

此大釜は往昔南町に設けたる大風呂に用ひたるものにて。嚴島神社に奉仕せる社家供僧の潔齋を爲す用に供したるものなりといふ。これに附隨せる横石竪石あり。竪石は平清盛の寄附にかゝり。竪石は毛利元就の寄附にかゝれり

以上の外同寺に安置せられたる阿彌陀如來坐像。弘法大師の像(大神作)如意輪觀音坐像(行基作)二王像(行基作)等。又凡作にあらざるなり

住吉神社。同寺の傍にあり。祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命の三座にして。これ元龜二年吉田兼右郷の觀請せられたる所なりといふ

石風呂。　大元神社に行く道の傍にあり。石を築きて造りなせる蒸風呂にして。古昔御山にて求聞持修行の僧徒嵐濕の氣に惱めるものを癒へしめんが爲に弘法大師の築かせ玉ひしものなりといふ

木比屋谷公園。　大元公園の東隣にあり。園内には拱木枝を錯へて天碧を陰翳し。閑靜なる一佳境なり

大元公園

市街の西端を距ること三町餘の處にあり。東西の兩側は蓊鬱たる岡巒に接し。北は渺茫たる滄海を隔てゝ遠山を銜み。又近く有の浦より米ケ浦に到るの沿岸翠黛と相對せり。南は平遠幽邃にして溪谷深く展開し。遙に雲中に聳ゆる繪馬ケ岳の絶壁を仰ぐべし。この絶壁より滴るところの清水木の根岩が根を潛りくゞりて大元神社の背面に出で。白雲洞の前を抄めて海にそゝぐ。之を大元川と爲す。其水極めて清冽。淙々として奢

岩碧樹の間を流れ。瀑然として溪流となり。泓然として池の如く。危橋亭榭この間を縫ふて趣を添へ。以て四季の遊客を迎ふ。これを旅館白雲洞と爲す。大元の櫻花は嚴島八景の一にして古人の吟詠に現はれたるもの渺なからず。石風呂の前より木比屋谷の平曠をよぎり。大元神社の神地内外百樹春色を迎へて黄鳥縱に嬌音を競ひ。花香雲影遠近相應じて大元瀑中に應するの景は一入の美觀にして。他に匹儔を見ざる所なりとす。加ふるに此地塵喧の外に卓絶して最も閑靜を極め。氣清く地靈に。緩遊の間自ら仙寰にあるの思ひならしむ

社下白櫻交影深。　北村篤所
三春花時無多日。　坐愛千金一刻陰
祠在仙山蒼波濱。　白櫻相映滿階春　從二位韶光
雲蒸霞散常彷彿。　一段風流仰此神
うらとほみよる舟まねく尾花かな　宗碩

いとまなき日ばかり花はさきにけり　鳳朗
大元や拜むも見るもはつざくら　風律

大元神社。

數百年を經たる樅樹杉樹の喬々として天に參はる樹林中に森然として聳ゆるものを大元神社となす。嚴島神社の攝社にして其創建本社と同時代ならんといふ。祭神は國常立尊、大山祇神にして。相殿には佐伯鞍職を祀れり。當社の境内は一千五百九十八坪を有し。周圍は即ち大元公園なり

境内に時雨の櫻あり。社前の山を楠山と稱し。この邊一帶を稱して篤の森といふ。杜鵑を聽くの勝地たり。在原業平の歌に曰く。五月雨にたちなば山のほとゝぎすふもとの森によなゝゝぞなく。と以て其由來するところ久しきを察すべきなり

大元公園より（水比屋谷公園まで一町。納々山（滑盛山）まで二町半　多寶塔まで三町四十間。大聖院遺跡まで七町の宮神社まで八町半。白糸の滝まで九町　公園道を通り紅葉谷公園で十町）

又同園より奥（富士岩まで七町半強。岩屋大師まで十七町弱。駒ヶ林まで二十二町半強。御山本堂まで二十四町強。）（絵馬岩窟まで十七町弱　御剱岩まで十九町強　御山二王門まで二十二町強）

經納山。 一に清盛山と稱す。字大西町の西側にある小岳にして。大元公園に往復する山道の支線に當れり。此地は往昔平清盛土中を堀りて經卷を納め。且つ許多の小石に法華經の首題を書して埋めたる古跡にして。現存せる北端の石塔は清盛塚と稱し。清盛の靈を祀れるなり。又塔の背部にある石燈籠一基は。平氏の臣難波六郎より奉納せる所なりといふ

消盡當年威焰々。寶塔三尺蒼苔青。
寂々千古無人中。空使松聲演法經

近年此丘の最も高きところに一の私設休憩所を構へ。茶を煮て遊客を迎ふ。之を見はらしと稱す。頗る山海の眺矚に富み。眞に見はらしの名に背かず

くるゝともいかでかとらむ島山の　禪高
なかめにあかぬはるの海面

多寶塔。 一に二重塔と稱す。多寶の岡にあり。建物方二間半。高さ相輪頂まで四十二尺四寸五分。大永三年六月多寶院開山歡公知藏禪師の創建にかゝるといふ。本尊は元藥師如來の像を安置せしが。維新の後これを他に移して清正公の靈を祀り寶山神社と稱す。本塔は明治三十四年八月を以て。內務省より特別保護建造物に編入せられたり

本塔建物の古雅にして優秀なる。全國又稀に見るところ。大永時代の建物としては稚きの感あり（大永三年は今を去ること三百八十一年なり）
此地は弘治元年九月毛利氏陶氏と合戰の時。陶氏が陣營を設けたる一部の地にしてこの山背を登ること七町にして。出城の舊跡に達することを得べし

出城。 出城は弘治の昔。陶氏が駒ヶ林の天險と連絡して。砦壘を設けたる舊跡にして。多寶の岡より駒ヶ林に達する中間の要衝に當れり。

此地市街及附近公園の全景を脚下に俯瞰し。又海を隔てゝ遙に近村の諸山を望み。眺望愛すべし。是より山背に添ふて登ること十餘町にして。駒ケ林の舊跡に達す（駒ケ林の件は御山の部に詳かなり）

大聖院遺跡。 御山の麓瀧の宮公園に接したる高原にあり。瀧山水精寺大聖院と稱し。眞言宗とす。世々嚴島神社の別當職に任し。全島第一の巨刹と門閥とを以て有名なり。世は座主と稱し西の御室と稱するもの是なり

當院の開基は其年曆頗る古きも。數度の回祿により其所傳を詳にする能はず。然れども大同元年弘法大師御山開前後に於て。本院の創設せられたることは明かなり。降て治承四年高倉帝行幸記に。當時の住職尊叡を以て。座主阿闍梨に爲し玉ふ云々とあり。又中興の開山は日輪上人にして。法器の聞へ高き學匠なりしといふ。天正中仁助法親王止住あらせ玉ひしより。仁和寺院家の任を世々にし。四の御室と稱するに至りしなり。仁助法親王の薨去は天正十二年十一月二十九日にして。其御廟所は御遺言により。對岸の大野村字赤崎に葬り奉りしが。今の宮島驛西端に存するもの是なり。明治十八年七月。今上天皇陛下宮町へ行幸あらせらるゝや。當院を以て行在所に遊ばされたり

當院は境内一千七百二十坪餘を有し。四邊蕭然。頗る絶塵の淨境なりしにも拘はらず。明治二十年十二月不年にして祝融の災にかゝり。本島唯一の巨刹は一朝にして灰塵となり。歴代の重寶古書等盡く烏有に歸し。千古の名刹。今はたゞ其礎石の落々たるを認むるのみ

明治三十四年一月。故小松宮殿下當町に御來島遊はせらるゝや。親しく本院の遺跡に臨ませられ。御歎惜の餘。現住職明尼僧都に對し。左の御令旨をたまはりたり

御令旨寫

宮島大聖院ハ古來西の御室ト稱シ。勅願ノ道場ニシテ。仁和寺門跡ト深キ山緣アリ。故ニ歴代　皇族ノ移住アラセラルヽ等。帝國著名ノ靈刹ナルコトハ今更言ヲ待タス。然ルニ一朝回祿ノ災ニ罹リ。爾來幾多歲月ヲ經ルモ。再興未ダ其緒ニ就カズ。空シク趾跡ヲ存スルノミナルハ。斯ル勝地ノ一大欠典トシテ衆庶ノ最モ遺憾トスル所ナリ。今回　殿下親シク該院ヘ臨マセラレ。御歎惜ノ餘。貴納ヘ舊觀復興ヲ御至囑遊バサレタリ。豈徒宜シク恩命ノ辱キヲ拜戴シ。盡瘁自ラ任ジ。速カニ復興ノ實ヲ擧ケ。以テ優渥ナル御令旨ニ奉答アランコトヲ。殿下ノ命ヲ奉テ特ニ申進候

明治三十四年一月十六日　小松宮家令　丹羽龍助

明尾快雄殿

豊臣秀吉公當島へ參詣の際。當院に於て和歌の御會あり。之に陪席せるもの

此以下三十五人。三十六詠あり。今其數首を錄す

きゝしよりなかめにあかぬ嚴島　關白秀吉

みせばやと思ふ雲の上人
ことの葉もをよばぬ春の海山を　義近朝臣

君がながめとなしておくらん
行舟もきみがみゆきのをりを得て　長盛

波もしづけき春の宮島
春ごとのころしもたらぬ山櫻　三成

よもきかしまのこゝちこそすれ
名も高き宮居はるかに來て見れば　太一坊

かすみのすゑのおきつ白浪

瀧の宮公園

瀧の宮公園は御山の麓にあり。園内頗る喬木に富み。松杉檜樅梅等の老幹古木參差枝を交へて空を蓋ひ。御山の前半面より直下せる清流はこの間を貫流して景を添へ。頗る幽邃の趣を極む。園内に大聖院遺跡、大師堂、瀧の宮神社、火消不動堂、白糸の瀧布等あり

白糸の瀧。 は瀧宮神社の背面にあり。其瀧の漲り落つるさま。千條の白糸を亂せるが如きを以て此稱あり。こゝに會したるの清瑩。灌莽喬樹の間に散點せる奇岩怪礁に觸れて曲折流下し。御手洗川に會して止む

瀧宮神社。 嚴島神社の末社にして。湍津姫命を祀れり。夏の夜に當りこの宮の附近を流るゝ溪水に添ふて。深綠叢中に映ずる無數の螢火は。一種の奇觀にして。古人の八景に數へたる所なりとす

瀧の宮の水螢（嚴島八景の一）

森々綠樹遶宮邊。南岳懸雲吐立泉
萬點水螢三伏夕。涼風亂影似秋天

藤原總長

澗陰、古廟倚葱籠。　自是幽人避暑宮　僧　獨　麟

晩映水簾螢水影。　輕和淡沫逐微風

この宮の光そへてやよひ〳〵の　右中辨光榮

ほたるも瀧の玉とみだるゝ

瀧の糸はぬきもとゞめず玉垣の　權大僧都惠通

たまとみだれて螢とひかふ

瀧見岩。

平面なる拾坪餘りの大盤石にして。瀧の宮神社の前石段道の傍にあり。これ治承四年三月高倉天皇當島へ行幸の際。此岩上に於て白糸の瀧を叡覽ありしより其名起れりといふ。其時曼珠院法親王の詠じ給ひし和歌あり。曰く。やまたかみ登ればのぼる春の日にくりかへし見る白糸の瀧

紅葉溪公園

嚴島神社の半面を環流せる御手洗川を遡り。南町の南端山勢の頓挫してうち開けたる處。御山山頂の一面より流下せる清流。南溪の幽谷を貫きて來たり泓然として一區の清澄を作り。楓樹松樹櫻樹の老幹參差幹を交へて此清流を蓋ひ。奇岩怪石は溪の兩脚に出沒して苔蘚色澄かに。涼亭拾餘區川の中外に峙ちて瀟洒畫けるが如く。溪邊殊に楓樹に富み。汀邊低く柯をたれて澄水に影をやどし。玉露紅をそめて愁ふる楓葉の秋に至りては。千紫萬紅。點々深き綠の間を綴りて一種錦繡の境をつくり。頗る清婉なる風趣を呈せり。若それ炎威爍くが如き三伏の候にあたり。遠く南溪の幽谷より澗底の清流を逐ふて絶へ間なく吹き來たれる涼氣は。又當園の特色にしてまことに塵襟を拂ふに足れり。かゝる境内に位置を占めて顧客を迎ふるもの。これを旅館岩惣と爲す

此是蜻州三勝、一。神明護得幾千秋　谷干城

滿溪、紅葉壽圖裡。一道、鳴泉繞屋流

丹楓、冷水奔流。臨水家々起小樓　木原桑宅

澗陰古廟倚蒼籠。自是幽人避暑宮　僧獨麟

晚映水簾螢水影。輕和濕沫逐微風　右中辨光榮

この宮の光そへてやよひ〳〵の

ほたるも瀧の玉とみだるゝ

瀧の糸はぬきもとゞめず玉垣の

たまとみだれて螢とひかふ　權大僧都惠通

瀧見岩。

平面なる拾坪餘りの大盤石にして。瀧の宮神社の前石段道の傍にあり。これ治承四年三月高倉天皇當島へ行幸の際。此岩上に於て白糸の瀧を叡覽ありしより其名起れりといふ。其時曼珠院法親王の詠じ給ひし和歌あり。曰く。やまたかみ登ればのぼる春の日にくりかへし見る白糸の瀧

紅葉溪公園

嚴島神社の半面を環流せる御手洗川を遡り。南町の南端山勢の頓挫してうち開けたる處。御山山頭の一面より流下せる清流。南溪の幽谷を貫きて來たり泓然として一區の清澄を作り。楓樹松樹櫻樹の老幹參差幹を交て此清流を蓋ひ。奇岩怪石は溪の兩脚に出沒して苔蘚色濃かに。涼亭拾餘區川の中外に峙ちて瀟洒畫けるが如く。溪邊殊に楓樹に富み。汀邊低く柯をたれて澄水に影をやどし。玉露紅をそめて愁ふる楓葉の秋に至りては。千紫萬紅。點々深き綠の間を綴りて一種錦繡の境をつくり。頗る清婉なる風趣を呈せり。若それ炎威爍くが如き三伏の候にあたり。遠く南溪の幽谷より澗底の清流を送ふて絶へ間なく吹き來たれる涼氣は。又當園の特色にしてまことに塵襟を拂ふに足れり。かゝる境内に位置を占めて願客を迎ふるもの。てれを旅館岩惣と爲す

谷干城

此是蜻州三勝一。神明護得幾千秋

滿溪紅葉畫圖裡。一道鳴泉繞屋流

丹楓際冷水奔流。臨水家々起小樓

木原桑宅

想得絃歌人散後。數聲鳴鹿滿山秋

紅葉谷手園より西の方（大聖院道跡まで六町。瀧の宮まで七町半　白糸の瀧まで九町。多寶塔まで六町　經納山（清盛山）まで八町半。大元公園まで十町　谷ケ原公園まで一町半。鳥居松公園まで四町半　瀧の尾公園まで七町半。梅林及金石地藏まで九町半　長濱公園まで十二町）

同　園より東の方

光明院。 字大町の岡天狗山の麓にあり。浄土宗智恩院末にして。本尊は阿彌陀如來の立像（惠心僧都の作）とす。當院は土地高燥にして清潔座上より山海の景色を望み得べし

當院の開基は以上八人度長時代）にして頗る英才あり。二世淨西能く其志を繼ぎて堂宇を開闢し。十四世素信元文時代）十五世怒信寛延時代）共に德望あり。中興の祖と稱せらる。八世學信（寛政時代）又法器の聞へ高く。稱後現住職荒谷隆德に至るまで。二十六世法燈連綿たり而して現時有する所の檀徒の戸數三百二十戸に及べり。當院に於ける國寶及寶物の主要なるもの左の如し

國寶

一阿彌陀如來立像　金泥、金切金模樣にして甚だ優美なり。御丈一尺六寸五分。作者未詳なれども、なかなかの傑作なり

一來迎彌陀如來　御丈二尺七寸。絹地金泥彩色の畫幅にして頗る古色を帶びたり。惠心僧都の眞筆なり

寶物の主要なるもの

一觀音像。　巨勢金岡筆

一不動明王像。　弘法大師作

一白河法皇御震翰

一二位尼時子像。　作者未詳

一善道大師像。　雪舟筆

一昆沙門天立像。　智證大師作

一地藏尊像。　弘法大師作

谷ケ原公園。 紅葉谷公園の東隣にあり。谷ケ原の鹿は古八景の一なれども。今や昔の面影を改めたり。同園平原の景は見るに足らずと雖も。山上の經營其當を得ば又一大勝地たるを失はず。當園は面積一萬八千二十坪を有せり

なく鹿のこゑは秋なるやつか原　風早寶積

をかべの松はときはなからに

雨餘豐草滿原春。水綠沙明境自眞　寺田臨川

麋鹿知無羅網。嘶々不敢遊人。

鳥居松公園。 園の中央に當り。數百年の歳月を經たる二株の松樹並び立ちて。鳥居の如き形を爲せるか故に鳥居松の稱は起れるなり。本園は字中の町の背部に位せる岡巒にして。眺望の勝に富めり。此邊櫻樹多く。陽春三四月の交に當りては。市中の老若男女。此園に來りて觀花の宴を張り。陶然として醉を散ずるの靠渺なからず

かたるともゑやはつくさんなか〳〵に　釋全宗

この島山のはるのけしきを

うちかすむこのしま山のさくら花　長吉

なかめにあかぬはるの海面

稱名庵。 淨土宗の庵寺にして。鳥居松公園の麓にあり

瀧の尾公園。 鳥居松公園の東方に位し。櫻花を以て顯はる。園内に不動明王堂及細布の瀧あり。當園より鳥居松公園を經て。谷ヶ原公園に通ずる新設道路あり

當園より（西鳥居松まで三町。谷ヶ原東梅林及金石地藏まで五町。紅葉谷まで七町半。長濱まで四町半）

寶壽院。 本尊阿彌陀如來。

眞言宗京都仁和寺派にして。其創立は天慶年中にありといふ。降つて文安の頃。高野の學僧宥順上人天奏を經。堂宇を再建せしを以て中興の祖と爲す。宥順より十九世を經。以て現往殿上見法龍に至れるなり

寶物の主要なるもの

一藥師如來畫像（明の嘉靖四十四年。聖烈仁明帝藏工に命じて畫かしめ玉へる物なる。豐臣秀吉征韓の時傳來し。故ありて當時に宿附せられたるものなりと云ふ）

一獻喜天皇肖像　作者未詳

一不動明王畫像　弘法大師筆

一三尊彌阿陀　惠心僧都筆

一五大尊畫像　唐人筆

一不動明王尊幀　妙澤筆

一愛染明王尊畫像　作者未詳

金石地藏。 上川德壽庵と稱し。禪宗の庵寺なり。本尊は金石地藏尊にして。佛體半石質半鐵質にして。甚新なる有名の佛像なり

梅林。維新の後荒廢せしが。近時梅樹の植附ありて。やゝ面目を改めたり

長濱公園

長濱は市街の北端なる機橋より三町餘の處にあり。海を隔てゝ西の方大友公園と斜に相對し。其洲濱三町三十間餘に渉り。全園の反別拾町一反弐畝歩に達せり

一條の白沙新月の形を劃し。入江を挾みて長く延び渡り。背後には蓊鬱たる青山を控へ。前面には渺茫たる蒼海を隔てゝ大野地御前等の諸山に對し。洲濱には拾餘株の老松偃蹇して背後の赤松林と相對し。翠色江の内外に映じて一段の風趣を添へ。眺望壯濶。頗る山水の勝に富みたり

海水浴場。はかゝる秀麗の地位を占めて洲鼻に建設せられたり。このところ海水極めて清澄。潮流の陳謝よく其度に適し。靜養頗る驗あり。夏時避暑をかね。茲に入浴せる輩尠なからず

右浴場は毎年陰暦六月中旬より。八月中旬まで數十日間開設するの例なるが。一人前金四錢にて終日入浴することを得るの例とせり

長濱神社。同濱にあり。嚴島神社の一社にして。興津彦命、興津姫命を祭り。相殿に所翁を祀れり

要害山公園

要害山公園は市街の東北端に横たはれる一の岡巒にして。西及北の兩面は海を隔てゝ沿海の諸山に對し。南は東部の市街を下瞰し。また高く御山の翠色を仰ぐべし。岡上には拾餘種の老松矯々として凌霄摩雲の狀勢を呈し。頗る眺矚に富みたり

今の要害山一圓は天文弘治の昔毛利元就が陶晴賢（全姜）を討滅せんとするに當り。敵を死地に陷れ。一時に勝敗を決せんとの疇略より特にこの島に渡り。此處に於て最初に些壘を築きたる宮尾城の舊跡にし

て。天文二十四年五月下旬工を起して經營晝夜を重ね。翌年卽ち弘治元年の夏に至りて功を竣へ。之に己斐豐後守同五郎兵衛及新里掃部介を部將として精兵三百騎を附し。守備を嚴にして敵を誘致せしめたる城塁たりしなり。要害の稱は此時より起れりといふ。此間に

今伊勢神社。あり。天照皇大神、八幡大神、素盞嗚尊、興津彦命、興津姫命、春日大神を合祀し。相殿に大織冠鎌足公の靈を祀れり

存光寺。禪宗の寺院にして。要害山の麓宇伊勢町にあり

第三編

御山

御山の開基

御山は本島中央の高山にして海面を拔くこと一千五百八十四尺餘。山上には求聞持堂を始めとして大小數十區の堂宇各處に散在し。蓊鬱たる樹林は是等の堂宇と共に巨岩絶壁の間を點綴して趣を添へ。山態頗る秀麗なり。これ今を去ること一千九十八年前大同元年丙戌の年十月。弘法大師唐より歸朝の際この山に登り。その山勢の秀靈非凡にして祥謨の氣漠々としてたち上るを見。錫を茲に留めて梵宮を經營せしところの靈場にして。講堂の香煙今になほ薫じて千古靈蹤の面影を存し。信者遊客の登山せるもの四季絶ゆる間なく。實に千古に顯絶せし靈跡なりとす

古人としなみ草を著はし御山の佳景を寄す。語調にして要を得たり今左に其一節を抄錄す

あけはてゝ御山にのぼらんとて瀧の宮へたちより。白糸の瀧をながめ。こなたかなたへゆきめぐり。靈佛靈社を拜するにいくところいふ數をしらず。危樓たかくそびゑて雲をおび。飛閣前はれて海にの

ぞめり。羅をよぢては巖窟にいり。松が根をとりて澗底にくだる。石泉したゝり落ちて清苔道なめらかなり。猿は子をよんで木の實をあざり。鹿は人になれて寺門にいる。登りつくして絶頂に座せば。忽ちてゝろ登仙するが如し。浦回のくまぐま遠つくしまで眼下にうかびて。蜑の小舟も松のこづゑにゆきかよへり。さて本堂虛空藏にまうでゝ佛舍利三光石など拜したてまつり。求聞持の行者に齋を供養し。御供物を頂戴し。奥の院弘法大師の前にぬかづき。それより舟にかへり侍りぬ

一の鳥居。 宇瀧町を距ること一町ばかりの處にあり。是より本堂まで登路十八町あり

懺悔地藏。 經塔。大師堂。火消不動堂。これ皆一の鳥居より御幸橋に到るまでの間にあり

斬不動堂遺跡。 豐臣秀吉公の護身佛なりといひ傳ふる不動尊を安んしたる處にして。公朝鮮征伐凱旋のゝち此處に納めたるなりと。されども現今荒廢して其影をとゞめず

御幸橋。 一枚の大石を以て架したる石橋にして。高倉天皇白糸の瀧叡覽ありし際架設したる所なりといふ

瀧宮神社。白糸の瀧。瀧見岩。（みなこの附近にあり瀧宮公園の部に出づ）

五町目。 御山の半腹に當り頗る眺望に富めり。市街及周圍の公園を眼下に望み。又海を隔でゝ遙に本郡沿海の諸山及安藝安佐兩郡の遠山を眺め得べし

中堂。 登路七町目にあり。元休所の設けありしも現今半荒廢せり

岩屋藥師。 九町目窟の下にあり

幕岩。 十町目十一町目前面の山腹にありて其形幕を張れるが如し。岩面は苔蘚露潤かにして點々班文を染め出せるが如く。其窮極するところの面積幾何なるを知らず。或は曰く此巖拾餘町の山谷に連なれりと

十一町目より十五町目二王門に到る四町許の間は全く石道にして。道の左右附近一帶殊に樹木喬くたちこもり。頗る幽邃の趣を極む

二王門。門の兩側に金剛力士二軀を安置せり。元この處に二の鳥居建設せられたりしも現今替廢せり。是より上部を御山の本山と稱し名勝舊跡谷所に散在せり

是より御山神社を經へ本堂より宮廻りを一周すれば五町餘の道程あり又此處より南方（二王門の下方にあり）降り道は奥の院に達する道路にして。五町餘あり

又此處より西方は駒ヶ林及護摩谷に達するの道路にして。駒ヶ林は登り三町にして達し得べく。護摩谷岩屋大師までは六町にして達することを得べし

御山神社

御山神社は市杵島姫命（中央）田心姫命（左側）湍津姫命（右側）の三柱女神を齋祀れる所にして。大盤石の上に安置せられ岩上の周圍瑞垣二十間を超へたり

このところ前は數百尋の絶壁にして深溪其底を没し。社前にたゝずみて谷底を下瞰すれば。覺へず心膽を寒からしむるものあれども前面に欝葱たる青山を望み。南方に森漫たる海洋を望み。頗る心胸をして爽然ならしむるものあるなり

登御山

雖愛雲光薄。尚知嵐氣遒。穿林飛瀑水。類春水
度嶺遇碧霞。松假堪爲棧。巖縣自作家。

樵童華表外。拍手喚神鴉。

同賞月

非隨仙侶來。安覩仙山月。直自海心升。同春水
又於波面沒。

御山神鴉の由來

此山上に雌雄一雙の靈鳥あり。御山神鴉と稱す。推古帝の朝佐伯鞍職既に宣下を蒙り。嚴島大神の御鎮座所を定めんとて島の浦々を巡檢するに當り。（島廻式の起因茲にあり）船養父崎沖合を過ぎる頃。粢を海上に浮べて其地點をトするに當り。一雙の靈鳥御山より飛び降り。粢を哺みて御山に運び去りたるを始めとし。爾後一千三百十餘年世々相傳して今日に至れるなり。（養父崎島喰式の部を參照すべし）此靈鳥は凡鴉より少し小くして美麗なり。常に御山に棲息して凡鴉の畏敬する所となり。其氣格極めて高尚なり

御山神鴉（嚴島八景の一）　中納言輝光

この山の宮居をさらでいくとせか
すめる島のつがひはなれぬ

嶮嶢靈嶽瑞煙霏。遥見黑衣下翠微。
蘋藻巧啣斜日外。翩々時掠客船歸。　僧日孝

求聞持堂

一に本堂と稱す。本尊は虛空藏にして其他諸佛像を安置せり。本堂は大同元年十月弘法大師當山開基の際。求聞持滿座の靈跡にして。開持の火今に絶へざること正に一千九十餘年。而して修法の行者信徒の還年に月に踵を絶たず。質に千古の靈場たり

本堂は大師の創立後平清盛公の營繕に次ぎ。降て長享元年將軍義尙公の再繕あり。其後慶長八年國主福島正則公の修繕ありしが。明治二十一年一月同碎し。同二十七年に至り町民義財を醵して現堂宇を建立したなり

堂の前面に錫杖梅と稱ふる古木あり。大師登山の時携へたる錫杖を立て置き玉ひしに。生ひつきたりと云ひ傳ふるもの是なり。又本堂の後に閼伽水と稱ふる清泉あり。大師修法のとき加持明星水として用ひ玉ひしところにして。水質頗る清冷にして甘美なり。又本堂の左側に曼陀羅石と稱ふるあり。數次の盤石にして石面に梵字及ひ三世諸佛天照大神宮正八幡三千七百餘座等の文字を鐫刻せり。大師自ら刻し玉ひし

所なりといふ

三鬼神社。 追張鬼神、魔羅鬼神、時眉鬼神の三神を祭れり。社壇は近年の修繕にして本堂の上にあり

鐘撞三。 堂内に梵鐘を懸く。これ治承元年右大將平宗盛公の寄附にかゝれり

毘沙門堂。 本尊毘沙門天（建物三間五尺五寸四面なり）

毎年陰暦正月六日の夜は其結願に當れるを以て。信者の諸方より參詣するもの尠なからず。現今なほ夜中提燈を携へて本山に登り。以て此堂に參拜するもの多きは古例を襲へるなり

石洞門。 大岩石蓋ひかゝりて自ら門の如き形を成せり

岩屋不動。 岩石自ら屋根の如き形を爲し。その内に不動尊を安置せり

此邊一帶の風景

鐘撞堂及毘沙門堂附近は老樹翁鬱として たちこもり。岩石皆千歳の苔を封じて古色を帶び。地靈に境靜にして頗る雅趣を呈し。殊に毘沙門堂より頂上石に達するの間は大岩石嶙々として天成の化工を極め。一歩一觀生面を開かざるはなし

御山頂上

頂上は宮廻の中央に當り豁然として一境をなせり。伊豫周防の諸山は雲煙の間に縹渺とし。佐伯安藝兩郡の諸島は白銀盤上に黛を凝らし。漁舟白帆の點々この間に來往せるさまは水禽の波に漂ふかと疑はる。又先峠山は翠鬟として南方に横たはり。繪馬ヶ岳は突兀として西方にそびへ。四邊の風物競ふて秀色を捧呈し。宛然たる名手の一大幅畫を展觀するが如し

この頂上の南端に峙てる巨岩を頂上石と稱す

龍燈杉。 數百年を經たる杉樹なりしが。今や朽腐して僅かに其根幹を存するのみ。昔御山に登りて毘沙門堂に參籠せる信者この杉樹の元に

所なりといふ

三鬼神社。 追張鬼神、魔羅鬼神、時眉鬼神の三神を祭れり。社壇は近年の修繕にして本堂の上にあり

鐘撞堂。 堂内に梵鐘を懸く。これ治承元年右大將平宗盛公の寄附にかゝれり

毘沙門堂。 本尊毘沙門天（建物三間五尺五寸四面なり）

毎年陰暦正月六日の夜は其結願に當れるを以て。信者の諸方より參詣するもの尠なからず。現今なほ夜中提燈を携へて本山に登り。以て此堂に參拜するもの多きは古例を襲へるなり

石洞門。 大岩石蓋ひかゝりて自ら門の如き形を成せり

岩屋不動。 岩石自ら屋根の如き形を爲し。その内に不動尊を安置せり

此邊一帶の風景

鐘撞堂及毘沙門堂附近は老樹蓊鬱としてたちこもり。岩石皆千歳の昔を封じて古色を帶び。地靈に境靜にして頗る雅趣を呈し。殊に毘沙門堂より頂上石に達するの間は大岩石纍々として天成の化工を極め。一歩一觀生面を開かざるはなし

御山頂上

頂上は宮廻の中央に當り豁然として一境をなせり。伊豫周防の諸山は雲煙の間に縹渺とし。佐伯安藝兩郡の諸島は白銀盤上に黛を凝らし。漁舟白帆の點々この間に來往せるさまは水禽の波に漂ふかと疑はる。又先峠山は翠鬟として南方に横たはり。繪馬ヶ岳は突兀として西方にそびへ。四邊の風物競ふて秀色を棒呈し。宛然たる名手の一大幅畫を展觀するが如し

この頂上の南端に峙てる巨岩を頂上石と稱す

龍燈杉。 數百年を經たる杉樹なりしが。今や朽腐して僅かに其根幹を存するのみ。昔御山に登りて毘沙門堂に參籠せる信者この杉樹の元に

到り。遙に腰細浦沖合に浮み出でたる龍燈を拜するの慣例ありしに依りて此名ありといふ。龍燈は通例舊暦正月元日より三日までの間。又は仝月六日の夜大宮沖合または腰細浦沖邊の海上に現するなり。夜漸くふけて山の影も見え難くなり。腰細の浦の眞砂にうち寄する波の聲まさに睡らんとするや。最初一燈浮み出づると見るに二燈となり三燈となり。須臾にして六七燈となり。三十となり。五十となり。無數の幻火水上に浮走するかと思ふうち又混じて一燈となり。而して明滅定りなく。風波強きときは火光動搖して見定めがたく。火色普通の燈火に類し多くは曉に到りて消滅すといへり。然れども年に依りて現出せざることも多く。其現否の年豫め期し難しといふ

龍燈のこと夫の聖崎の蓬萊と共に嚴島海上に於ける二幻象に屬せり。これ素より物理的現象の表出たるに相違なきも。其眞理は未だ明明せられざるなり。特に抄記して學者研價の資に供す

滿干岩。丈餘の岩石にして側面の中央に穴あり。海水の滿干につれて潮水或は留り或は流出すといふ

船岩。其形恰も船の如き大盤石にして。岩下に地藏尊を安置せり

大日堂。本尊大日如來（建物四間四方なり）弘法大師御山開基同時の建立にして。往古神護寺と稱したるもの是なり。これ大師修法の道場として建立せるところにかゝるといふ

目洗藥師。大日堂の傍にあり。眼を病めるもの本尊に祭するもの尠なからず

三界萬靈水掛地藏。此處岩石の間より清洌なる泉水湧出せり

水晶石。丈餘の大石にして中央の穴より窮へば石中水晶を以て充たされたりといふ

奥の院

御山と先峠山との中間谷底に當り。自ら別區域を爲せり。茲には大師堂、（及籠所）彌勒堂、水手向地藏尊等安置せられたり。此邊最も喬木に

富み老樹鬱々として畫もなほ暗く。所謂深山幽谷の境にして自ら天地の人間に非らざるを覺へしむ。先峠山の半腹には帆掛岩鏡岩屏風岩等の名石あり。又奥の院より谷底の溪流に添ふて海岸輔踏潟に通ずる道路あり。二拾餘町にして達するを得べし

御山二王門より以西に於ける名勝舊跡

鹿屋谷。 二王門より二町五十間餘の程にあり。路上に平面なる大岩石横たはり。山高み溪深くして頗る閑靜を極め。眺望殊に佳なり。藤原興風詠じて曰く。あらし吹く鹿屋の谷のたに深く月影清し雲のくれなみ

三劔岩。 往古三段に折れし劔を納めたる所にして。岩下に觀音の小あり

岩屋大師

昔蚕大師は一名龍ヶ窟と稱し。又護摩谷の窟と稱す。巨巖天を蓋ひ四面皆岩壁にして自ら石室を作し。僅に門口を有するのみ。而して窟の内壘拾數壘を敷きうべく又直立して歩行するに足れり。窟の奥に祀れるは弘法大師の靈にして。是實に同大師護摩修法の舊跡なりといふ

（是より大元公園に通する道路あり。下り路十八町にして大元神社に達す）

此邊附近一帶の地は巨岩落々として山骨を組織し。古松雜樹森々として其間を點綴し。岩上の蒼苔露深くして錦の如き斑紋を點し。徑路曲折昇降頗る急なり。仰で觀れば削れるが如き千尋の絶壁突如として頭上に落下し來らんとし。俯して眺むれば深谷遠く渡りて雲煙の鎖ざせるを見。四邊の風物轉た幽凄なるを覺ゆ

繪馬岩。 岩屋大師の東面に聳ゆる絶壁中にあり。然れども近づいて之を認むるを得ず。富士岩附近よりこれを遠望する時は。絶壁の中央に當り駿馬後方を顧みつゝ千尋の谷底に向ふて降下する黑色の印影を留め。頗る奇觀を爲せり

龍ケ洞。岩屋大師石室を距る數十間の下大岩石のもとにある岩穴にして。其深さ測るべからず。古昔龍の脱け出でしといひ傳ふるもの是なり（是より大元公園に達する途中八町餘にして富士岩と稱する名岩あり）

駒ケ林（此地岩上に馬蹄の跡あるを以て一に龍ケ馬場と稱す。駒ケ林は駒返しの誤傳なり）

駒ケ林は御山と相對して聳ゆる繪馬ケ岳の絶頂にして。海面より高きこと方に一千五百三十四尺餘。西方に面する部分最も嶮峻を極め。數百尺の絶壁一面の巨巖にして。恰も刀もて削り立てたるが如く。有名なる繪馬岩の奇觀は此裡に點綴せらるゝなり。而して此山頂に達するに兩道あり。一は鹿屋谷に附近よりし一は二重塔の方面よりす。山頂に近くに隨ひ昇路漸く急に岩石次第に多く左折右往して登なり。然れども歩一歩其風觀を新たにし。自ら心神の清爽を覺へしむ。頂上には巨鯨の如き二個の大磐石兩面に分れて横たわり。百數十人を座せしむるに足れり。この邊一帶の地喬樹に乏しと雖も。風趣ある松樹檜樹檜類

岩間岩間の間を文どりて景を添へ。自ら一種の佳境を作成せり。眸を凝らして遠近山海の眺矚を縱にせば周圍の絶勝歴々指顧の間にあり。仰で大虚を望めば浩々乎として羽化登仙するが如く。自ら胸宇を濶大にし覺へず洪遠の氣象を誘發せしむ

此地誠に稀有の一大異境たるにも拘はらず。暗黑の裡に埋沒せられたりしは頗る怪むべきなり

此とてころは弘治元年九月毛利元就陶晴賢を討滅せしとき。陶氏の部將弘中參河守隆包及中務の父子が市街の各地に轉戰して其大勢の去れるを見るに及び。百餘騎の部下を率ひて此險を扼し。以て毛利氏の大軍に當り。三晝夜の血戰を爲して花々敢最後を遂けたる古戰場にして。

今を去ること三百四十九年前のことなりとす

蓋し隆包父子のこと名分上より論ずる時は背史上の罪人たるに相違なきも。晴賢の部下落々たる二萬有餘の軍中にありて克く其終始を全ふし。戰國武士の先驅として其本分を盡したるの一段は陰德太平記の詳載せる所にして。今この絶壁の形勢と參照して考ふる時は。自ら懷古の情に堪へ得ざらしむ

るものあるなり

朝日觀音堂。駒ケ林より數町の處にあり

夕日觀音堂。朝日觀音堂より一町餘の下にあり

右兩堂共に駒ケ林より山背に添ふて降るなり。降路急なれども山海の眺望に富み。沿道の風色又一種の生面を開けり

登御山率記所見古詩三十韻　石川丈天

嚴島苔溟上。御山素雲邊。廟貌壓琅壕。霞關溢穹天。
伊昔蓬瀛地。縹渺棲神仙。應眞飛錫來。安期賣藥還。
谷谿坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗憩樹蔭。袒裼盥飛泉。
旁礴無人境。登臨意惘然。芝草醉玄解。松子飽僅佺。
巨石競怪狀。遠客愕屯邅。浮景接崑閬。層陰延虞淵。
回顧蹈蓬磴。躊步凌絶巔。俛仰忘身世。聘懷獨踊躚。
麗魅時出沒。蝙蝠共飄翩。歸墟千仞谷。弱水萬里船。

對西青壑聳。亘東翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。
双飛巢蕃域。幾度見桑田。日靈尊如在。市杵姫所題。
二聖三千載。小祠八九椽。空海據神區。造求聞持傳。
蒲牢吼枸籠。華表峙術阡。猿叫煙霧裡。鹿臥殿堂前。
木客姑獲鳥。化鬼又變蛊。居僧慟被害。群民懼爲虔。
嗟非有遺骨。疇能久稽旁。多病訪負局。修生問稚川。
高蹈嘯巖曲。溥言避塵緣。早洗許由耳。將拍洪涯肩。
茲游重難繼。卑懷聊欲宣。讀者可姍咲。信筆記一篇。

第四編

七浦

島廻に關する事

島廻。

嚴島の周回七里三十二町餘。この周圍浦々の中に於て。約一里づゝを隔てたる海岸樞要の地に於て七ヶ所の神社あり。この神社を以て俗に七胡子と稱し。又ての神社を齋祀りたる七ヶ所の浦を以つて七浦とは稱ふるなり。島廻とは此七浦（七浦とは神社を鎮め祀りたる主要なる浦所を稱するまでにして實際周圍全体の浦の數は八十餘ありと知るべし）を東より順次漕ぎ廻りて。各浦の神社に參拜するの謂にして。其起因は推古帝の朝（一千三百十餘年前）嚴島神社御鎮座同時に始りたる事なりとす。

島廻の順序及儀式。

島廻を爲さんには前日先つ身體を潔齋し。當日未明三笠濱より船を艤して出發するなり。先づ神官の船には四手を懸けたる榊を立て。兩舷に幕を張り。之に祭主として神官一人樂人二人使丁一人水主數人與に乘組むなり。次に願主參拜者一同數名の船歌師（歌師とは七浦沖合を進航しつゝ船中にて歌を唱ふるなり）と共に別船の裝飾せるものに乘組み。外に仕度船（儀式に關する仕度飲食調理の具を載せ旅宿の主人これに乘組むなり）一艘。合せて三艘舳艫相銜みて漕ぎ出し。大鳥居沖より嚴島神社を遙拜しつゝ東方より進航を始むるなり。進みて杉の浦に着すれば拜殿に於て奏樂神文あり。終りて朝饌の饗あり。退出の際拜殿の前に芽の輪を立てたるをくゞりて祓を爲す。（以下各浦に於ける儀式の次第はほゝこれに準ずるなり）これより順次に各神社の參拜を了へ。御床浦にて茅の輪を納め。網の浦にて上陸し。大元神社に參拜の後酒宴の饗あり。終りて後嚴島神社に報饗の神樂を奉り。以て其式を終了するなり

浦廻及浦遊。

浦廻とは以上の如き慣行上の儀式を用ひずして。希望者が隨意に浦々に船を漕ぎ寄せ。適宜各神社に參拜するものをいひ。浦遊とは拜神上の意味を有せず。又必ずしも全島を周廻するまでもなく。望むところの浦々勝地に船を寄せて遊覽するものをいふ

しまぐ〜もよせ來る霧のまかきかな　紹巴

なみに雁なく月のあけぼの　良政

龜のうへの山かゝすめるおきつ舟
硝子のくにやわか葉のいつくしま

玄仍

露川

長濱より聖崎に到る沿岸。

この沿海に小なきり浦、大なきり浦、清水ケ浦、米ケ浦、屏風ケ浦等の浦々あり。山低く水碧にして海波常に嵐光を醮し。風光頗る清麗なり

聖崎

聖崎は棧橋より拾餘町の程にあり。全島の最北端にして。この邊一帶山勢最も低く。屏風ケ浦牛ケ濱蓬萊岩等の勝地相共に接近して特殊の奇勝を賦す。前には廣島灣浩渺として一大磨鏡を開き。後には御山繪馬ケ岳の諸峯翠巒として天漢に朝するあり。岸邊の蟠松低く梢をたれて清艶なる水波に映ずるの邊。二個の蓬萊岩雙々相擁して突元海中に聳へ。灑洒頗る風韻を極めたり

神山縹渺小蓬萊。七浦風烟與海開

寺田臨川

今古精禮無廢馳。閑宮時紫霞外

蓬萊の出現。

嚴島圖繪に曰く。「この沖合蓬萊と稱するものあり。三四月の頃風恬かに波穏かなる時。此處より浮き出づ。その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし。其上松柏生茂り。或は宮殿樓閣の象ありて其壯嚴たゞへん物なし。光明海上に彩きわたりて次第に消滅す。今も往々これを見る人あり」云々

聖崎近海に於ける蓬萊の出現に就ては。西遊記輪池鐵菅等の古書にも見へ。又漁父古老の口碑にも傳稱せらるゝ所、蓋し稀に見るところの物理的現象に外ならざるべし

海連嚴島勝區多。歴氣浮來映曉霞
樓閣遙傳天樂響。方知天女弄琵琶

小竹老人

杉の浦。

は聖崎より海上四五町の程にあり。陸上よりすれば棧橋より十五六町にして達することを得べし。洲濱二町四十間餘。平原と海面との間に横たはり。松樹叢生して北海の渺茫に臨み。遙に佐伯安藝沿

海の諸山と相對し。眺望快濶。恰も水彩畫中の景に髣髴たり

杉の浦神社。 同浦の西端にあり。島廻第一の參拜所にして。底津少童の命を祀れり

いく世をか杉の浦風吹く音も
神さびにけるこの宮居かな

中納言持豊

金剛水。 同浦東端の海邊より入ること二町餘。小丘の麓にあり。其水清冽混々湧出して晝夜を分たず。傳へいふ當郡廿日市洞雲寺の金剛和尚此處に座禪せしとき始めて湧出せるものにして。同寺の金剛水と其水脈相通せりと

包ケ浦。 此浦は毛利元就陶晴賢の陣を襲ひたるとき。草津より船を此處に寄せて上陸せられたる地點に當れりといふ

包ケ浦神社。 同浦の東端なる裏岩の上に建設せられたり。祭神は鹽土翁にして七浦七社の外なり。鹽土翁は神武天皇西偏より起りて天下を平定し玉ひし時帷幕に參じて功勞尠からざりし人なり。元就この浦より上陸して遂に勝を奏するや。社壇を改め社領若干を寄附せられたりといふ

七浦風煙隨棹移。　神鴉飛處羽差沱
快巖奇石麗如畫。　畫裏秋光盡上詩

寺田臨川

鷹の巣神社。 島廻第二の拜所にして底筒男命を祭れり

腰細浦神社。 島廻第三の拜所にして中津少童命を祭れり是より海面漸く開き遠景又一入の觀あり

沙みてば浪もいはほをてし細の
浦吹く風やはげしかるらん

中納言持豊

大砂利浦。 御山本堂の眞浦に當り。平原廣くして濱開け優に一部落を爲すに足れり。又一佳境と爲す。是より樫の木浦、藤ケ浦、鰈崎、青海苔浦、養父崎、山白浦等の各地を經。草籠崎まで殆んど二里半に渉

るの間沿海一帶特に磯岩に富み。海面廣く東南に開きて陽氣を帶び。松樹雜木の類磯際まで生ひ茂りて稍を波にひたし。風景概して壯麗なり

青海苔浦

青海苔浦は棧橋より海上三里半弱の程にあり。中央に清流あり。平地あり。又入江あり。青海苔神社あり。地南海に面するを以て。氣候温和。眺望快濶にして又一勝區たるを失はず

青海苔浦神社。 同濱の中央にあり。島廻第四の參拜所にして中筒男命を祀れり。島廻の船この浦に着するや。祭事の後拜殿に於て午飯を饗し。配膳に於て青海苔を用ふるゝと古例なりとす

高安ケ原。 青海苔川の溪流に添ふて遡ること十三町許にして。高安ケ原と稱する地あり。弘治の昔陶晴賢戰ひ利を失ふや。親臣數人と與に此處に遁れ來り。主從環座。慨歌劔舞して最後の名殘を留め以て自盡したるの舊跡たり。左に辭世の歌を錄せん

何をゝしみなにをうらみんもとよりも　陶晴賢

此ありさまの定れる身に

莫論勝敗跡。人我暫時情。一物不生地　柿並佐渡守房精

山寒海水清。

ありときゝなしと思ふも迷ひなり　山崎勘解由隆方

まよひなければ悟りさへなき

おもひきや千年をかけし山松の　伊香賀民部大輔隆正

朽ぬるときを君に見んとは。

此時供奉の士外四人同じく自盡す。後元就晴賢の首を實驗し。廿日市の洞雲寺に葬りて石塔を建て。慰懃に供養せられたりといふ

養父崎

養父崎神社。 祭神靈鳥にして七浦七社の外とす。島廻の船此沖合に

達すれば神官楽を海上に浮べ。鳥向楽を奏すれば一雙の霊鳥御山の方面より飛び降り。交互波に浮べる楽を喙へて御山に運ぶ。此時船中より拍手して禮拜す。是を鳥喰式とは稱するなり。もし船中に於て穢れある時は霊鳥の出向なしといふ（谷崎山の中腹に石の小屋と稱する名石あり。岩石壁みて家屋の如き形を爲し。頗る奇觀たり）

山霊高占碧崔嵬。千歳祐民最異哉
設供舟中吹玉笛。一雙玄羽出雲來
一拳螺髻渺茫中。老樹周遭天女宮
又有神鵜能報吉。舟行長ト去來風

僧　獨麟

この邊一帶浦もなく洲もなく。磯岩快石森々たる山脚を沒して海中に散點せるところ。一小古祠を安鎮し。頗る雅趣あるのみならず。前は海面遠く開けて遠近の諸島を望み。風光甚明媚なり

伊藤東涯

七浦の島めぐりする舟のうちの

中納言持豊

もゝの音あかす神やきくらん
いつまでもみるめはかれしいつくしま

似雲

めぐる浦回を面かげにして

山白濱。此地七浦の中央に當り。濱邊のかゝり頗る青海苔浦に類し。洲濱三町餘。川流あり入江あり神社ありて又一佳境たり

山白濱神社。同濱にあり。島廻第五の拜所にして表津少童命を祭れり

かしこしな名さへ動かぬ山しろの

中納言持豊

濱邊にしめし神の宮居は

草籠崎。本島南端の一岬角にして。御床山脈のはしりて海に窮するところ絶壁たゝみて海中に入り。頗る奇觀を爲せり。岡上に有名なる早咲の櫻あり。是より桃の木浦棟の木浦下り松浦長の浦等の浦々を越へて須屋浦に到るの間三十餘町。山海の風光頓に一段の趣を改む。白

帆施るく風を衆みてこの間をよぎる。身は山水畫幅中の人たるを覺へざるなり

須屋浦

須屋浦は嚴島西端の一角に當れる地にして。三角形を劃したる一條の洲嘴蒼々たる海中に斗出せるところ。青松一面に叢生し。天光松影倒まに海に落ちて空中に一道の翠虹を現す。當園の松原は面積四千六百七十坪を有し。其州濱の延長五町十七間餘に達せり

此浦に名水あり。干潮の際磯ぎはより湧出す。其水甚だ清冷。漁人これを汲んで須屋の清水と稱す

須屋之神社。

同園に接し境内八十七坪を有せり。島廻第六の拜所にして表筒男命を祀れり。島廻の際此神社の拜殿に於て僧餅の饗あること古例なりとす

浦はるゝすやの朝なぎ夕なぎに　　中納言持豊

みる眼はさこそたぐひなからめ　　小西哲雲

仰見暦山幾萬松。波間澄映蘆高峯。
此勝若比松洲景。水色山光又々濃

御床浦。

山光水色相掩映して一區の佳境を作成せり

御床浦神社。

島廻第七の拜所にして市杵島姫命を祭れり。この地は大古市杵島姫命が最初御降臨ましませし時の眞床にして。社前に大盤石あり。岩面龜裂して自ら龜甲の如き紋章をなせり。嚴島神社の御紋章に龜甲を用ふるは茲に起因せりと云ふ

あふげなほ天降りましゝその神の　　中納言持豊
御床のいはほ動きなきかげ

内侍岩。

治承の昔德大寺大納言實定卿嚴島へ參詣(參詣の時は中納言たりし)の時。内侍の中に有子と稱ふるものあり。年紀十六七。希代の琵琶の名手たるの故を以て實定卿に愛せられけるが。實定卿の歸京に際し。この處の

君上に來たりて別れを悲歎せしに依り。内侍君の稱は起れりといふ

蟠踏潟。洲濱二町半。平原廣くして溪深く入り。溪流一道御山の奥の院より來たる。此溪流に添ふて奥の院に達する道路あり。川は平原の西端に添ふて流れ川口に石橋を架す。殊にこの邊一體は頗る喬樹に富み。枝幹交錯して林を爲せるもの幾千株なるを知らず。此地は治承の昔平宗盛御山寄附の梵鐘を鑄造せし所なりといふ

是より江の浦に到るまで數町の間沿岸相連りて屏風の如く。蟠松低く相をたれて一種の清錦を畫き。加ふるに鬼石、大黑石、乘石及梶石等の名石ありて趣を添へ。海波若然嵐光滴らんとするばかりなり

網の浦。大元浦の隣に當り公園地に屬せり。海面遠く開けて眺望に富み。園内に淺黄櫻和生松等の名木あり

七浦に於ける風景上の觀觀

全島の中央御山山脈の四面に分岐して環海に窮する處。無數の小支脈となり。此小支脈末端の海に接するところ或は屏風の如き絶壁となり。或は落々たる磯礁快若となり。而して其小支派各末端の相對峙せるの中間に幾多の平地川流入江を作り。又其平地の〇面に接する所に於て松原となり。洲濱となり。洲著斷續。灣澳屈曲。斷岸出入。磯若凹凸點羅して種々の變態を演出せるところ。古松雜樹。森々鬱々として到る處に生ひ茂り。此間を貫流せる幾多の清流は絶へず海に朝して海藻の髮を梳り。以て億兆の鱗屬を育せしむ。加ふるに周圍遠近の蒼溟に經繞星羅せる無數の諸山群嶼は御山群峰の落々翠色と相映帶して景を添へ。七浦の風煙海に連りて雅趣あり。延長七里三十餘町八十有餘の各浦。一樹一觀の妙味を有するのみならず。岸邊の一樹一石も自ら天眞の風趣を存し。千姿萬狀殆んど端倪すべからざるなり。若し夫れ朝暉夕陽海面を彩り。或は月光金波を漂らし。金龍躍り。銀鱗の盛する を視。或は滿目白鷗々たる遙萊全島の大觀を極めんか。其絶美絶景。

豈よく筆舌の及ぶ所ならんや。蓋し嚴島全島海岸四圍の風光は御山名地の諸景と調和して二大絶勝を作爲せるもの。而して吾人は世の識者が。其眞個の價値を認識せしものあるや否やを發見するに苦しむものなり

嗚呼世の郡ての勤勞者よ。自然ばかくも吾人に慰安の仙窟をめぐみ賜へり試に一兩日の行を緩ふして斯世界無比の樂園歩を枉げ。以て活力の休養をはかるも人生の要務にあらずとせんや。蓋しボートにまれヨットにまれ又和船にまれ。將來に於ける本島の四周は。方に權を採つて自由に游遊を試むべき好適地にあらずや

みつしほはたゝ大海のいづみかな　宗祇
みつしほにうかぶや龜の花のやま　遊行
なみや月かげあらひけりいつくしま　松梅寺
こぎいづる秋の夜舟のかぢとりて　昌叱
松の雪うみも彩色やいつくしま　重潮
江山頗係念。行樂賞春晴。俯看魚龍躍。仰聞猿鶴鳴。月昇燈影淡。風靜磬聲清。要永別雲水。留詩記姓名。　石川丈山
舟路無風晴晩嵐。奇觀須向此間探。神姫早已垂靈跡。古史何曾載妄談。積水遠連天下山。層巒高峙地東南。未輕若句若休怪。海內名區持屈三。　川田剛

雜錄

嚴島港。全島の要津にして東部市街の海岸に當れり。港の東西に二個の波止場あり。この兩波止場の兩側に於て更に二個の大雁木（西の大雁木は神地なり）あり。皆興に船舶の繫留に便なり。棧橋は東大雁木の東方に位し。

其東隣に小浦あり。又船舶の繫留所たり。當港は純然たる港灣の形なるも。内海にして波穏かなるを以て優に數百艘の船を泊し。又拾餘艘の汽船を碇泊せしむるに足れり

宮島渡航株式會社。　棧橋の上り口字小浦にあり

憲兵休憩所。　棧橋附近字濱の町にあり

郵便電信局。　棧橋より二町餘。海岸通三町目にあり。明治三十五年一月より同十二月迄で一ヶ年間に於ける當局電報及郵便取扱件數左の如し

一電報（發信數四千八百三十二件　着信數五千二百三十四件）

一郵便（發信數十八萬三千六百五十三通　着信數十五萬四千三百十六通）

一小包郵便（引受數一千六百三十三個　配達數一千八百十六個）

八田貯蓄銀行支店。　郵便電信局の隣にあり

嚴島尋常高等小學校。　字中の町にあり。明治三十五年十二月末現在に於ける教員及生徒數左の如し（當校には嚴島の特産と称せる手工科の設けあり）

一教員數（横長一人。訓導四人。計六人）

一生徒數（在籍者（尋常科二百七十人　高等科八十五人）　出席者（尋常科二百十五人　高等科七十三人））

嚴島警察分署。　海岸通一町目西波止場の口にあり

國有林保護官舍。　字大町光明院の下にあり

嚴島役町場。　字大町にあり

演劇場。　字北の町にあり。明神座と稱す

勸工場。　字久保町にあり

航路標識。　亀石燈竿と稱す。　鞴踏・潟沖にあり

嚴島の物産

當町の物産は所謂木竹細工にして。　梔轤物杓子類竹細工彫刻物等を主

とす。而して轆轤細工には茶盆、菓子器、筆立、會席盆、燭臺、菓子鉢、茶入、茶壺、茶臺、茶卓、煙草盆、煙草入、行厨入、楊枝立、針指、碁入、盛物臺、時計臺、寫眞掛、体操器械、杯、ニッポ、パイプ及小兒玩弄具等あり。又匙類には圓形、卵形、茄子形、貝形、葉形及西洋匙等ありて大小一ならず。竹細工には花瓶、菓子入、屠斗盆、竹箸、及柄杓等の如きあり。其他楊枝類、齋菜籠細工、肥松細工、卷莨入等枚擧に遑あらざるなり

又食用品としては蠣、アサリ、ミル貝、魚類、薯蕷、岩茸、蕨、豆類、雪花漬、惣太郎漬、宮島饅頭、裏櫻餅等の如きありて賞味すべく。其他盆栽植物としては石蘭、片葉蘭、鶯蘭、孔雀蘭、岩千鳥蘭等ありて愛玩するに足れり。

町民職業別の大要　三十五年九月調

竹木細工百九十人○轆轤師百人　○杓子削（匙類を含む）六十人

産物店五十四戸　○旅人宿四十二戸○大工職六十五人

渡船業者三十八人○飲食店三十戸　○案内者二十人

穀物商十八戸　○彫刻職十八人　○樵夫十七人

藝妓（藝妓は月々增減ならず三十五年度に於て二十五名以上四十名以下の間を上下せり）　其他略之

宿屋組合規約に依りて定めたる旅籠料及飯賄料

旅籠料（一泊二飯）

一等　（甲）金壹圓五拾錢（乙）金壹圓　（丙）金七拾錢

二等　（甲）金五拾八錢（乙）金四拾八錢（丙）金參拾八錢（丁）金參拾四錢

飯賄料（二食）

一等　（甲）金五拾錢（乙）金四拾錢（丙）金參拾錢

二等　（甲）金貳拾五錢（乙）金貳拾錢（丙）金拾五錢（丁）金拾參錢

産物店の組合規約

産物店に於ても組合規約の設けあり。殊に其賣品價額の如き一切正札

を附し。其直段に依りて物品を販賣するの定めなれば。購入者に於ては便利なりとす。

嚴島案內記 終

明治四十二年八月十一日印刷
明治四十二年八月十五日發行
明治四十二年十一月一日再版

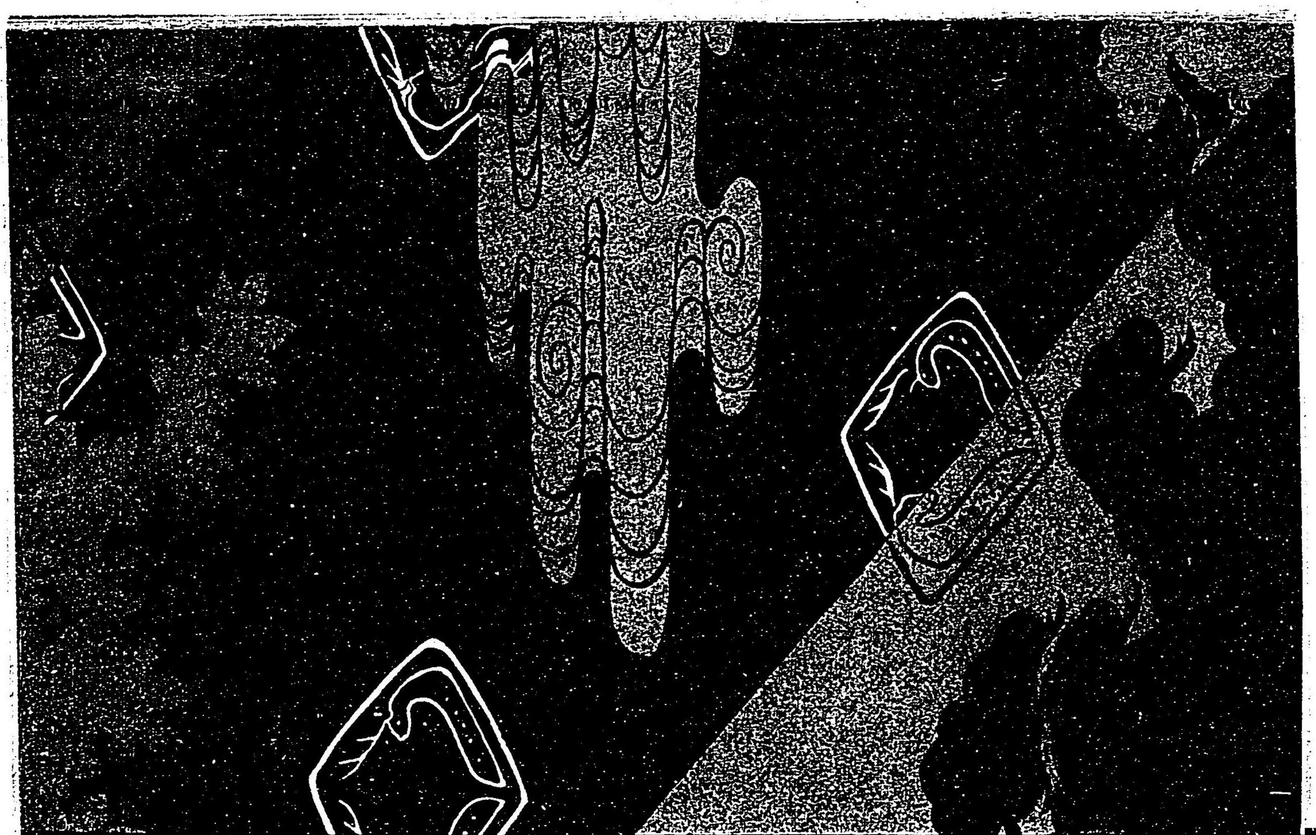
不許複製

著作者　廣島縣佐伯郡嚴島町五百七十五番邸　兒玉周平

印刷兼發行者　廣島縣佐伯郡嚴島町三百五番邸　瀨田律三

發行所　廣島縣佐伯郡嚴島町三百五番邸　嚴島寫眞帖嚴島繪はがき發行所　春錦堂

259
718



特46
179

厳島案内記

国立国会図書館

025753-000-6

特46-179

厳島案内記

児玉 周平／著

M42

ADC-3289